大宰府条坊跡

第１５０次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書
第 95 集

2009

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第１５０次発掘調査

例　　言

１．本書は共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

２．この調査は井上知義氏の委託を受けて筑紫野市教育委員会社会教育課文化財担当(現文化振興課 文化財担当) が実施した。

３．調査対象地は、筑紫野市大字二日市704番地の4 (現二日市中央５丁目１番17号)で、開発面積306.6㎡である。

４．試掘調査から契約に至るまでの業務は、奥村俊久（現文化振興課 歴史・芸術文化担当係長）が行った。

５．発掘調査は、渡邊和子（現文化振興課 文化財担当主査）が行った。

６．現地での調査にかかる遺構の実測および写真撮影は渡邊が行い、基準点測量業務を㈱ 東亜建設技術に委託した。

７．報告にあたっては、遺構の性格付けを行い、井戸跡をＳＥ、土坑をＳＫ、溝をＳＤ、柱穴をPit、性格不明遺構をＳＸの略号とした。

８．出土遺物の実測は一部について渡邊が行い、他は ㈱ 埋蔵文化財サポートシステムに委託した。遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。

９．出土遺物の写真撮影は、 (有) 文化財写真工房に委託した。

10. 本報告で記載する時期区分については、下記の文献を参考にした。
「大宰府条坊跡Ⅱ」　太宰府市の文化財第７集　太宰府市教育委員会　1983
「大宰府条坊跡XV」　陶磁器分類編　太宰府の文化財第49集　2000

11. 報告書掲載挿図の製図については、㈱ タクトに委託し一部を渡邊が行った。

12. 挿図中に使用した方位は、すべて座標北を記している。

13. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

目　　次

本 文

頁

1．はじめに …… 5
2．位置と環境 …… 5
3．調査の内容 …… 6
①基本層序と出土遺物 …… 6～7
②SD …… 7～22
③SE …… 22～35
④SK …… 36～44
⑤Pit …… 44～45
4．まとめ …… 46

Fig.（挿図）

Fig. 1　周辺遺跡分布図（S 1/10,000）… 1
Fig. 2　周辺地形図（S 1/2,500）…… 2
Fig. 3　遺構配置図（S 1/100）…… 3
Fig. 4　周辺遺跡関連図（S 1/900）…… 5
Fig. 5　表採遺物実測図（S 1/3）…… 6
Fig. 6　SD土層実測図（S 1/30）…… 7
Fig. 7　SD出土遺物実測図（S 2/3・1/3）… 8
Fig. 8　SD４・５・７出土遺物実測図（S 2/3・1/3・1/4）… 12
Fig. 9　SD位置図（S 1/200）…… 13
Fig.10　SD土層実測図（S 1/30）…… 15
Fig.11　SD10出土遺物実測図（S 1/3）… 17
Fig.12　SD10出土遺物実測図（S 1/4）… 18
Fig.13　SD1出土遺物実測図（S 1/4）… 19
Fig.14　SD12出土遺物実測図（S 1/4）… 19
Fig.15　SD17出土遺物実測図（S 1/2･1/3）… 20
Fig.16　SD17出土遺物実測図（S 1/3）… 21
Fig.17　SE位置図（S 1/200）…… 22
Fig.18　SE出土遺物実測図（S 2/3・1/3・1/4）… 24
Fig.19　SE４出土遺物実測図（S 2/3）…… 25
Fig.20　SE４出土遺物実測図（S 1/2）…… 25
Fig.21　SE４実測図及び出土遺物実測図（S 1/60・1/3）… 26
Fig.22　SE出土遺物実測図（S 1/4）…… 28
Fig.23　SE７出土遺物実測図（S 1/3）…… 30
Fig.24　SE出土遺物実測図及びSE実測図（S 1/3・1/60）…… 32
Fig.25　SE出土遺物実測図（S 1/4）…… 34
Fig.26　SE９出土遺物実測図（S 1/2）…… 35
Fig.27　SK実測図（S 1/40）…… 37
Fig.28　SK出土遺物実測図（S 1/3）…… 40
Fig.29　SK出土緑釉陶器実測図（S 1/3）…… 42
Fig.30　SK出土遺物実測図（S 1/2・1/4）…… 43
Fig.31　Pit出土遺物実測図（S 1/3）…… 44
Fig.32　Pit出土遺物実測図（S 1/3・1/2）…… 45

ＰＬ．（写真図版）

PL.1　SD …… 4
PL.2　表採遺物 …… 6
PL.3　全景 …… 9
PL.4　SD土層 …… 10
PL.5　全景 …… 11
PL.6　SD …… 14
PL.7　SD10出土遺物 …… 18
PL.8　SD12出土遺物 …… 19
PL.9　SD17出土遺物 …… 21
PL.10　SE …… 23
PL.11　石帯 …… 25
PL.12　SE出土遺物 …… 25
PL.13　SE出土遺物 …… 27
PL.14　SE出土遺物 …… 29
PL.15　SE７出土遺物 … 31
PL.16　SE出土遺物 …… 33
PL.17　SE出土遺物 …… 35
PL.18　SK …… 38
PL.19　SK出土遺物 … 41
PL.20　出土遺物 …… 42
PL.21　Pit出土遺物 … 44

Fig.1　周辺遺跡分布図（S1/10,000）

Fig.2　周辺地形図（S1/2,500）

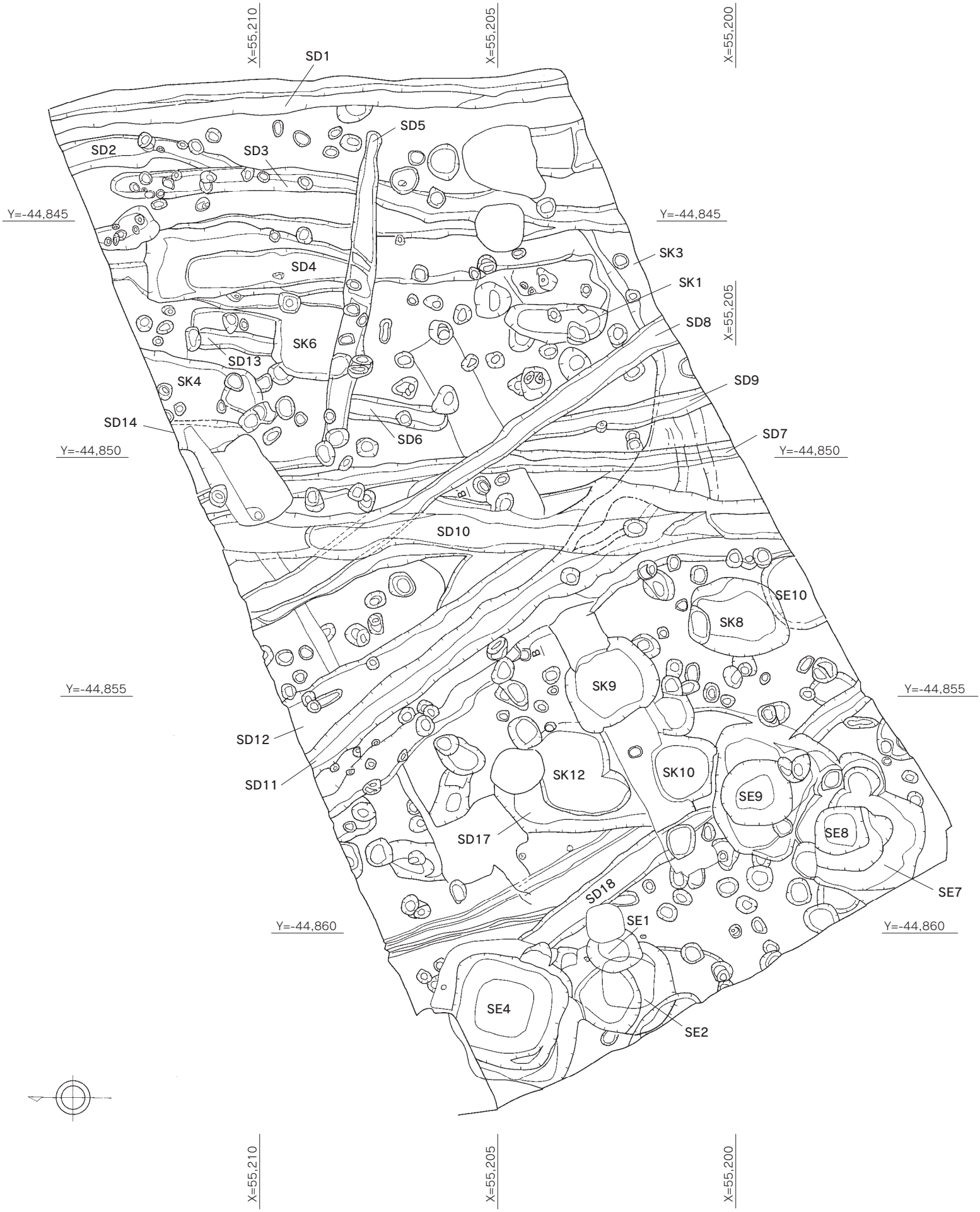


Fig.3　遺構配置図（S1/100）

PL.1 SD

SD1～12の全景（東から）

SD18周辺（南から）

１．はじめに

平成６年３月５日付けで筑紫野市大字二日市704番地の４（現二日市中央５丁目1番17号）開発面積306.6㎡における「文化財所在の有無について」が筑紫野市教育委員会（以下市教委）社会教育課文化財担当に提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地内であり市教委では同年３月18日に試掘・確認調査を実施し、対象地の全域に遺跡が遺存していることを確認した。この試掘・確認調査の報告後、事業者より文化財保護法に基づく届出が提出され、市教委は県教育委員会（以下県教委）に進達した。

工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知が県教委からあり事業者に伝えた。その後事業者と発掘調査についての協議を行い、発掘調査を次年度当初に実施する事で協議を完了した。同年６年４月７日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、発掘調査は平成６年４月１４日に開始し、同年５月２日で完了した。

２．位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。市の北から東にかけては三郡山系の山々が、また西には背振山地から続く牛頸低山地がある。この両山系に囲まれた最も低い位置は阿蘇４火砕流の主たる流路となり、この流路が狭長な二日市平野として今に至る。この狭長な平野部は福岡平野と筑紫平野の分水嶺でもある。市の北部は太宰府市と境をなし、市中心部には鷺田川が流れて、太宰府市通古賀付近で御笠川に合流して福岡平野を北流し、博多湾へと注ぐ。鷺田川の流域には数多くの遺跡が所在している。

調査地点は、この狭長な平野の市街中心部にあり、鷺田川の西岸に位置する。ここは鏡山猛氏による「大宰府都城の研究」では右郭一条十八坊にあたり、先に確認された中央大路西側溝延長ライン上にある。

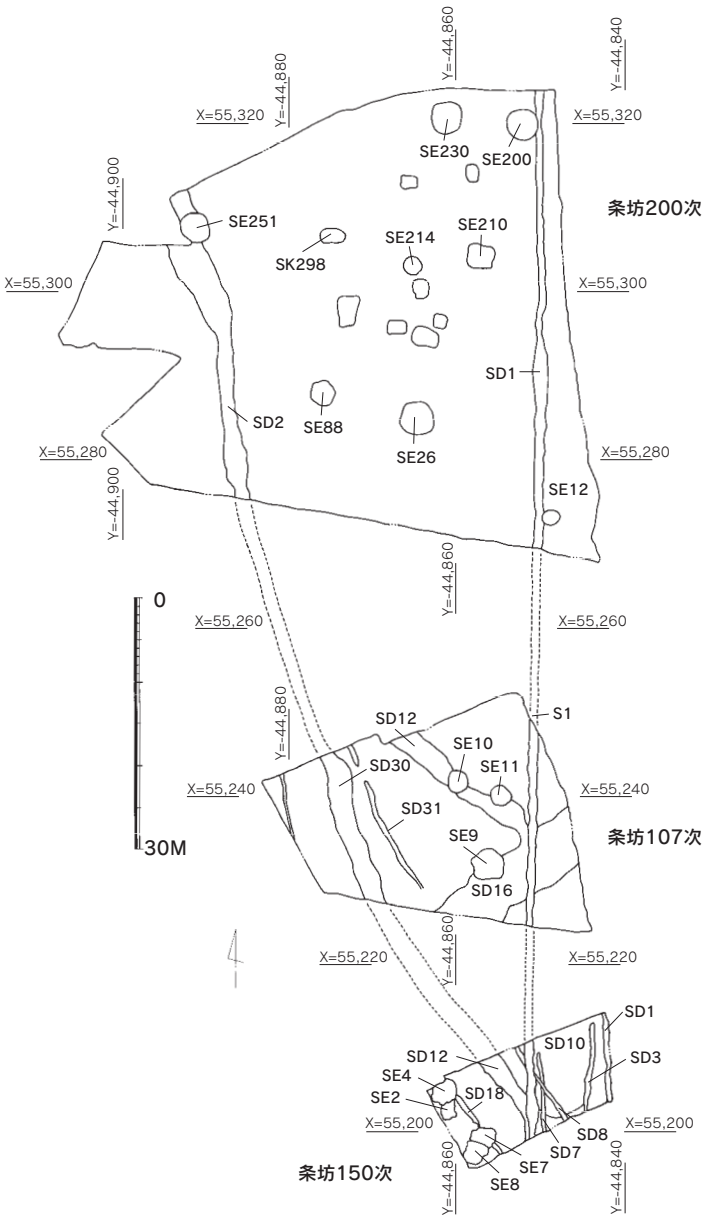


Fig.4　周辺遺跡関連図（S1/900）

３．調査の内容

調査地点は、筑紫野市大字二日市704番地の4（現二日市中央５丁目１番17号）に所在する。調査対象面積は260㎡である。調査は旧国道３号線沿で交通量も多く、対象地の面積も狭いため遺構検出面より上の層を外部に持ち出し東・西に分割して調査を行った。検出された遺構は、SE（井戸跡）10基、SK（土抗）13基、SX（性格不明遺構）１基、SD（溝）18条、Pit（柱穴）168個である。また掘立柱建物跡としてまとまるPitは確認できなかった。

①基本層序と出土遺物

調査前は駐車場となっていたため、最上層（１層）にはバラスや廃材の混在した真砂土が盛土として20～30㎝程客土されている。２層目には暗茶褐色微砂質土（炭混じり）の層が15～20㎝程堆積し、ここから切り込まれたカクラン穴には、現代の茶碗等が混入していた。この層は駐車場以前の宅地面（表土）と思われるが、調査区の北側ではこの層は削平されているが、旧地形で北側のほうが高い事も考えれば、元来北側の２層目は堆積していなかったか、堆積は薄かったかと思われる。

３層目は茶褐色砂質土層の遺物包含層で、調査区の南・北側には、25～30㎝の堆積がある。この堆積層を除去すると遺構検出面となる。この遺構検出層は、調査区北側は明褐色砂質土層、調査区南側では褐色砂質土層として堆積している。また大宰府条坊跡第200次調査で確認されたような黄褐色粘質土の地山は、調査区中央部付近に部分的に見受けられるが東・西・南・北側のいずれにも存在しない。

出土遺物（Fig.５-1～4、ＰＬ.２）

確認調査や剥土中で出土した遺物を掲載した。

１は土師器の坏aで、径15.2㎝、底径9.6㎝器高3.5㎝を測る。器表は摩滅。焼成は普通。色調は内外とも灰白色10YR8/2をなす。外底面はヘラ切り後ナデで調整し板状圧痕がのこる。

２は須恵器皿aの小片。現存高2.5㎝、胎土に細砂粒を含むが、焼

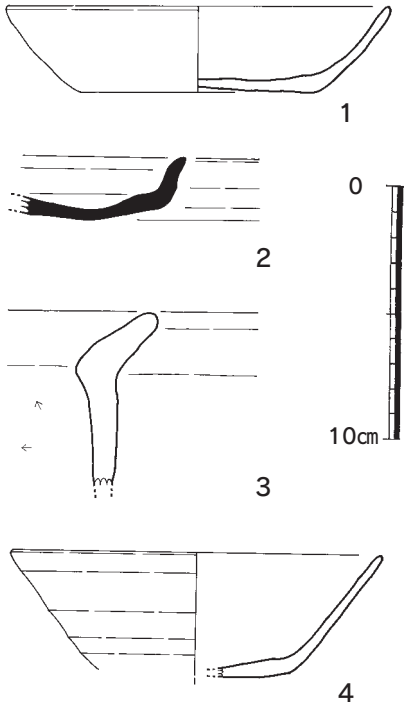
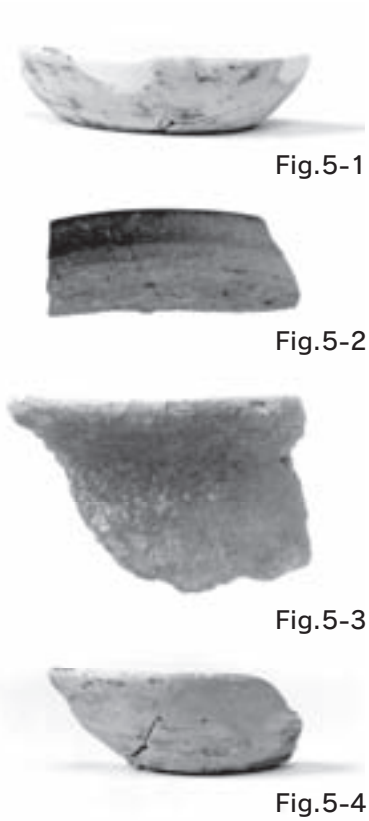


Fig.5　表採遺物実測図（S1/3）



PL.2　表採遺物

成は普通。色調は内外ともに灰色N6/で外面に自然釉が付く。**3**、土師器甕の口縁。残存高6.9㎝、色調は内外面ともに灰褐色7.5YR4/2を呈し、外面の調整は摩滅のため不明で内面はケズリ調整されている。胎土に赤褐色粒・雲母・石英粒を多く含むが焼成は良い。**4**は土師器の大椀ｃで、高台部分は剥離。復元口径14.7㎝、残存高5㎝を測る。内外ともに灰白色10YR8/2を呈し、外底面はヘラ切り後ナデによる調整。胎土には少量の細砂粒を含んで、焼成は普通。**1・3・4**は大宰府編年のⅣ・Ⅴ期、**2**は大宰府編年のⅡ・Ⅲ期のものである。

②ＳＤ（溝状遺構）

SD1　調査区の東端に位置し、隣地との境界の溝とし旧地形と隣地との高低差を確認できる。西側だけが検出され幅は不明、検出長10.8ｍ、検出の深さ50㎝を測る。**Fig.6**に示す様に溝埋土は調査区北側の最上層には厚く客土が堆積し、二層目には地山混じりの茶褐色土、下層に砂礫混の茶褐色土堆積する。調査区南側土層は最上層には暗褐色砂質土、二層目として地山の混じる明茶褐色土が、下層には暗茶褐色土が堆積するが、最下層の堆積層は不明。断面形状は肩より20㎝で、段がつき、そこから下場へと向かう。溝の平面はやや蛇行するが、主軸はN-3°-Eにとり、西側溝SD10にほぼ並行する。出土した遺物は、**Fig.7-5～11**で時期の異なるものが混在する。**5**は土師器小皿aで復元口径9.6㎝、底径7.3㎝、器高2.2㎝を測る。外面は摩耗が著しく調整は不明。内外ともに浅黄橙色7.5YR8/3を呈す。胎土に細砂粒を少量含み、焼成はあまい。白磁椀Ⅳ類2aの**6**は復元高台径7㎝、残存高4.6㎝。釉調は灰白色10Y8/1で底面以外に施釉がされる。高台部分は削りだしによる。胎土には微細な黒色粒を含むが焼成は良好。**7**は須恵器の高台付坏で残存高2.4㎝、復元高台径9㎝を測る。高台部は貼付で底面は回転ヘラ切り後ナデによる調整がなされ、外面の一部に自然釉がかかる。内面暗青灰色5PB3/1、外面灰白色N7/の色調を呈す。胎土には細砂粒と白雲母を多く含むが、焼成は良い。平瓦片の**8**は残存長10.1㎝、幅7.1㎝、厚み1.75㎝で裏面には布目痕がある。色調は内外ともに灰白色N7/の色調をなす。胎土に3㎜程度の砂粒を含むが、焼成は良い。一部にケズリによる面取り部が残る。**9**、細粒砂岩製の砥石片。丸味のあるものを研いだのか湾曲した部分を残し、全面砥石として使用されている。その後表面

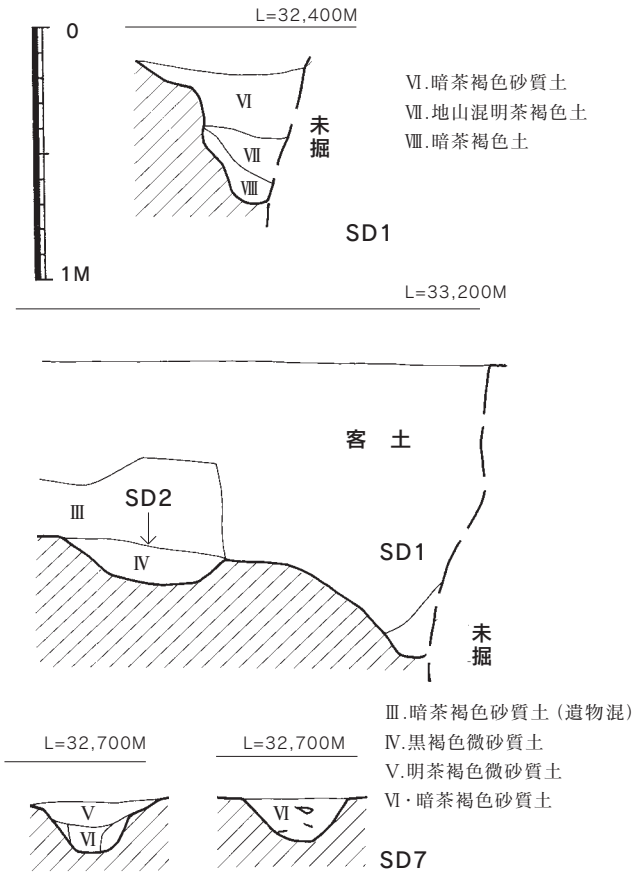


Fig.6　SD土層実測図（S1/30）

を敲石的用途にしたのか敲打痕を残し、現存長8.2㎝、幅7㎝、厚み3.5㎝を測る。**10**は現存長4㎝、径0.4㎝の釘。基部と先端部は欠損。**11**の釘は、基部と先端部を欠損する。径0.7㎝で「L」字に曲がる。**5**は大宰府編年Ⅸ期、**7**はⅡ・Ⅲ期に該当する。

SD2　SD1の西側SD3に切られる。溝埋土は単一土の黒褐色微砂質土で層序では底面には水が流れた様子は窺えない。検出長3.5ｍで北側から西側に緩やかに弧を描く溝。幅は北側が65㎝、西側が40㎝と狭くなる。断面は逆台形の形状をなし、深さ15㎝と浅い。出土遺物は砕片が少量で時期も不明。

SD3　SD1の西側で、SD5に切られ、SD2を切る。溝埋土の堆積はSD2と同様に単一層序を示す。検出長10.8ｍで、幅60㎝を測り、北から始まり南にほぼ直進し、SD5付近で西側に振れて、さらに延びて調査区外へと向かう。北側の終息部分は丸くなり、深さ８㎝の浅い「U」字状の断面形を呈す。出土遺物はなく時期も不明。

SD4　SD3の西側に所在し、SD5・SK3に切られ、SK2を切る。溝埋土は、ここも単一層の堆積状況である。主軸の方向はSD1とほぼ同じ向きを示す。検出長9.8ｍ、北側の1.4ｍ幅が本来の溝幅であろう。SD5より北側は二段の形状をなす。上段の深さは5㎝前後で30㎝前後のフラット面を持ち、そこから下段の下場へと向かう。下段は深さ8㎝前後の浅い「U」字状の断面となる。SD5付近で下段の溝が終息し、一段の溝へ変わる。出土遺物は**Fig.8-12・14**でともに上層からの出土。**12**は現存長6.8㎝、幅0.5㎝、厚み0.5㎝の釘。頭部は潰れて曲がり、先端部も曲がって欠損している。断面形状は正方形をなす。**14**は須恵質の平瓦。現存長11.5㎝、厚み2.25㎝を測る。図面上端・右端が端部になっている。上端はケズリ調整、右端は粘土から分割する際のケズリ痕を残し、半分は未調整のままである。裏面には布目痕があり、表面にはタタキ後にナデ調整が施されている。表裏面ともに灰色10Y5/1と一部灰色N5/1の色調をなす。胎土には3㎜程の砂粒が多く含まれるが、焼成は良い。

SD5　調査区東側のほぼ中央部に所在し、SD3・4・6とSK6を切る。溝埋土はここも単一層の堆積となる。検出長6.5ｍ、幅50㎝。溝の両端はSD1やSD7の直前で終息している。主軸はE-6°-Sとなり、西側から東南方向へと向く。出土遺物は

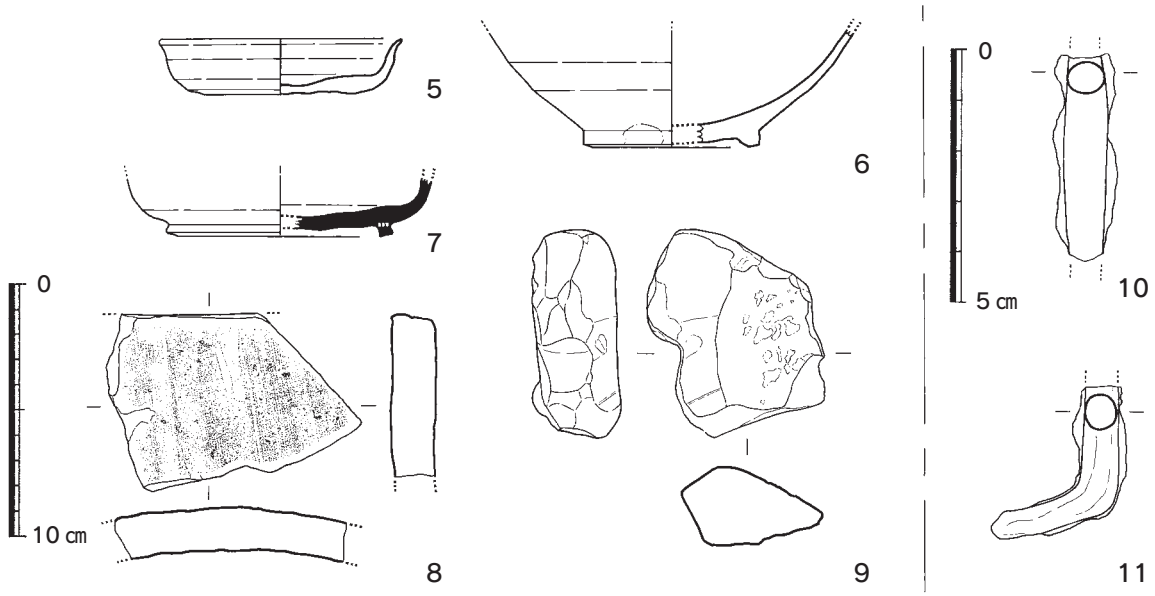
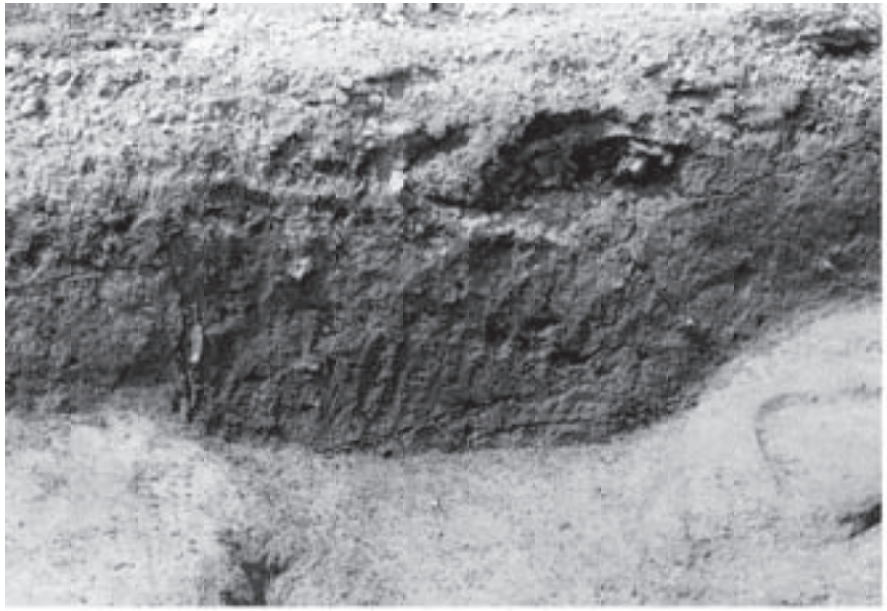


Fig.7　SD出土遺物実測図（S2/3・S1/3）

PL.3　全景

SD1～SD8全景

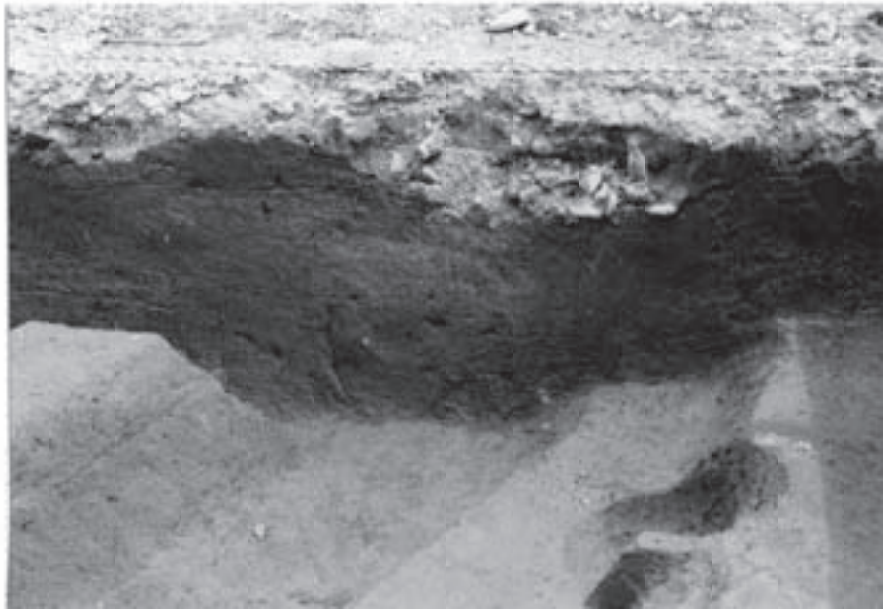
SD8周辺



SD2

SD7

SD9

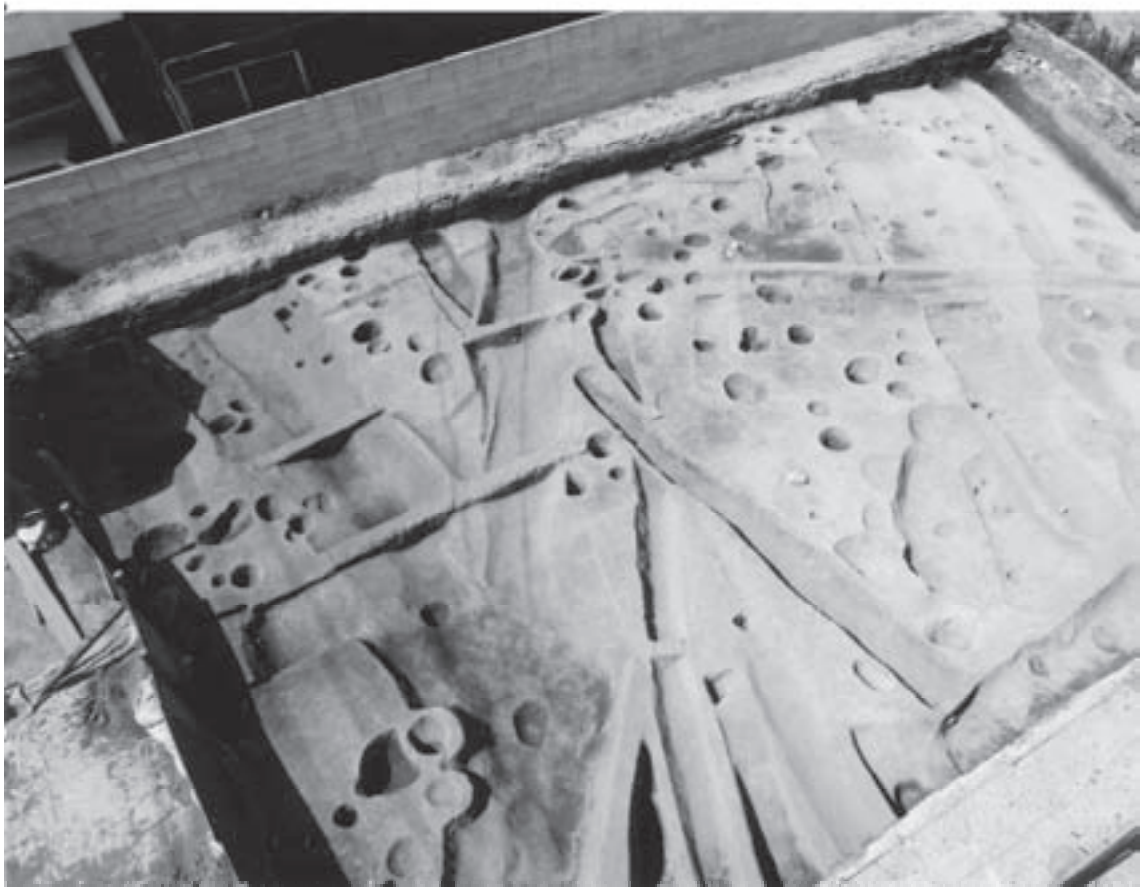


SD10

PL.4　SD土層

PL.5　全景

SD7周辺



SD10周辺

Fig.8-13の釘だけが出土した。先端部を失っているが現存長8.2㎝で、断面は径0.45㎝の丸の形状となり、基部の平面は丸の形状で潰れた状態にある。

SD6　SD8の東側SD5に切られる。溝埋土は単一層が堆積する。検出長３ｍ、幅50㎝、深さ５㎝前後を測り、浅い「U」字状の断面形状をなす。主軸はN-３°-Eにとる。不連続な溝の一部かも知れない。

SD7　調査区のほぼ中央部SD10の東側に所在、SD8に切られる。**Fig.6**に示す様に調査区南側の層序は砂礫混じりの茶褐色砂質土の単一土だが、北側の層序は、上層に黄褐色微砂質土、下層の両壁側には暗茶褐色土層があり、側板を使用していたようにも思われるが、北側では確認できていない。また下層には北側と同じ砂礫混じりの茶褐色砂質土が堆積している。検出長11ｍ、幅50㎝前後、深さ18㎝の逆台形の断面形状をなす。主軸はほぼSD10と同じにとる。北側の検出位置は、ほとんどSD10に接するが、南側ではほぼ並行するが、溝間は90㎝の間郭をもつ。出土遺物は**Fig.8-15・16**である。**15**の土師器の中皿a、体部内外は摩耗が著しく調整は不明。底部はヘラ切り後ナデの器高1.5cmで、内面浅黄橙色7.5YR8/4、外面淡橙色5YR8/4と一部浅黄橙色7.5YR8/4の色調をなす。胎土には砂粒を含んで、焼成は悪い。大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期に該当。**16**は土師器の坏a。復元口径12.8㎝、復元底径6.8㎝、器高3.6㎝を測る。内外面ともに橙色5YR7/6をなし、胎土に白色の微砂粒と赤褐色粒を多く含んでいるが、焼成は良い。大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期に該当する。

SD8　調査区中央部に位置し、SD10・SD7・SD9を切る。溝埋土は黒褐色微砂質土の単一埋土層となる。検出長10.8ｍ、幅55㎝前後を測る。溝の断面は逆台形の形状をなす。主軸はN-32°-Wにとり、中央大路西側溝のSD10よりは大きく西に振れる。この溝とほぼ同じ主軸をとる溝が**Fig.9**に示すSD11・18となる。出土遺物は砕片が多く、図示できず時期不明。これは条107次SD31に続くものと考えられる。

SD9　SD7とSD8の間に位置し、SD8に切られ、南側未調査区へ続く。検出長3.8ｍ、幅40㎝でやや蛇行した溝で深さ５㎝前後の逆台形の断面形状をなす。主軸をN-3°-Eにとり、ほぼSD10と並行している。SD6と同時期と考えると一連の不連続な溝となる。出土遺物はなく、時期は不明。

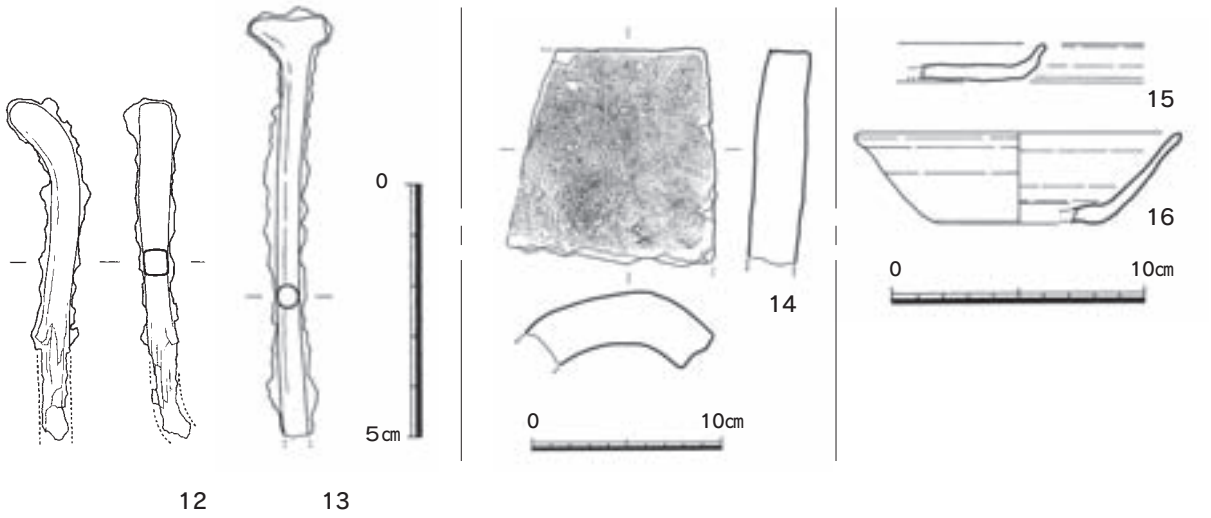


Fig.8　SD4･5･7出土遺物実測図（S2/3・S1/3・S1/4）

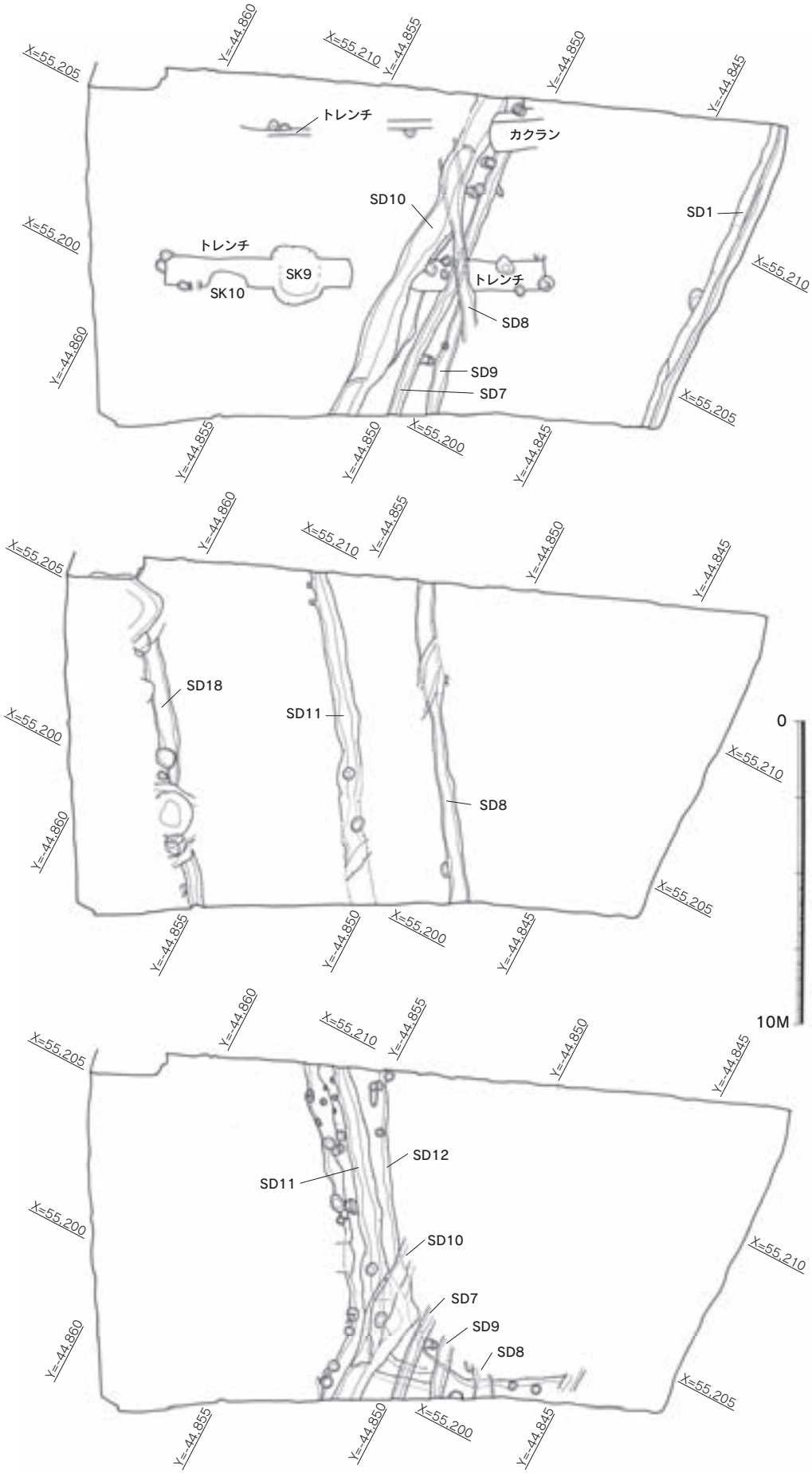
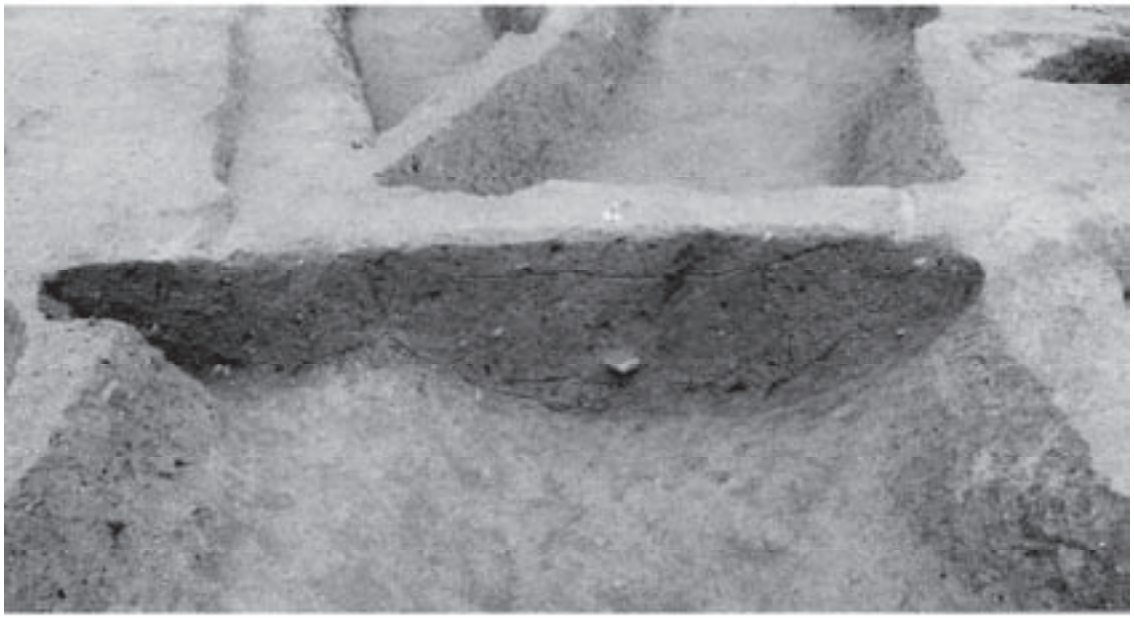
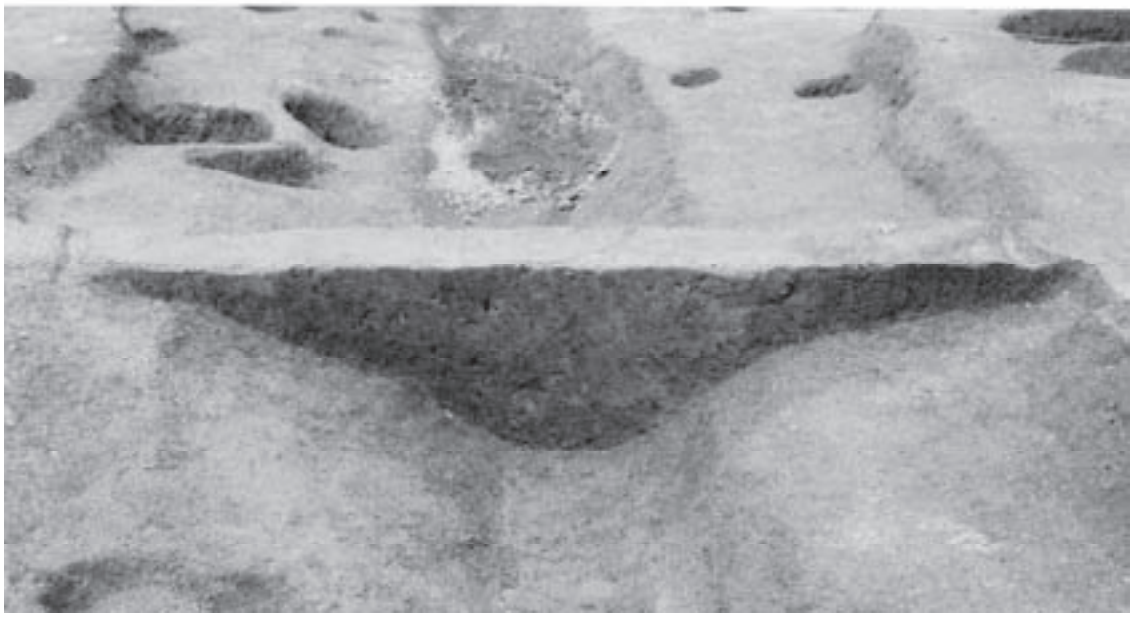


Fig.9　SD位置図（S1/200）

SD10・12B～B′



SD10（南側）



SD11・12（南側）

PL.6　SD

SD10　調査区の中央部に位置し、SD8・SD11・SD12を切る。検出長11.8m、幅は0.9～１m、底面幅60㎝、深さ45㎝前後であるが、**Fig.10**の土層図から確認できる事は、北側の溝の堆積層はカクラン層が上層にあり、溝の埋土中にも切り込んで上層の堆積層も失っている。中層には茶黒色砂質土と下層には粒子の粗い茶黒色土の一部が確認できる。南壁側土図では当初の溝幅1.4mで、深さ45㎝、溝の断面形状は、西側に幅40㎝のフラット面をもつ断面の溝となる。その後これを掘り直して溝幅1.1mとなる。ここにも西側に幅20㎝のフラット面をもつ溝が形成される。掘り直し後の埋土は上層に黒褐色微砂質土、下層に茶褐色砂質土が堆積する。溝の掘り直しは条200次調査でも確認されている。掘り直し後の溝底面幅35㎝で、緩やかな壁の逆台形の断面形状となる。溝の平面形はやや蛇行しているが、溝は北から南へと延びて未調査区へと続く。北側には調査の完了した条107次・条200次が近接し、このSD10は、**Fig.4**に示す様に条107SD1・条200SD1につながる溝となる。

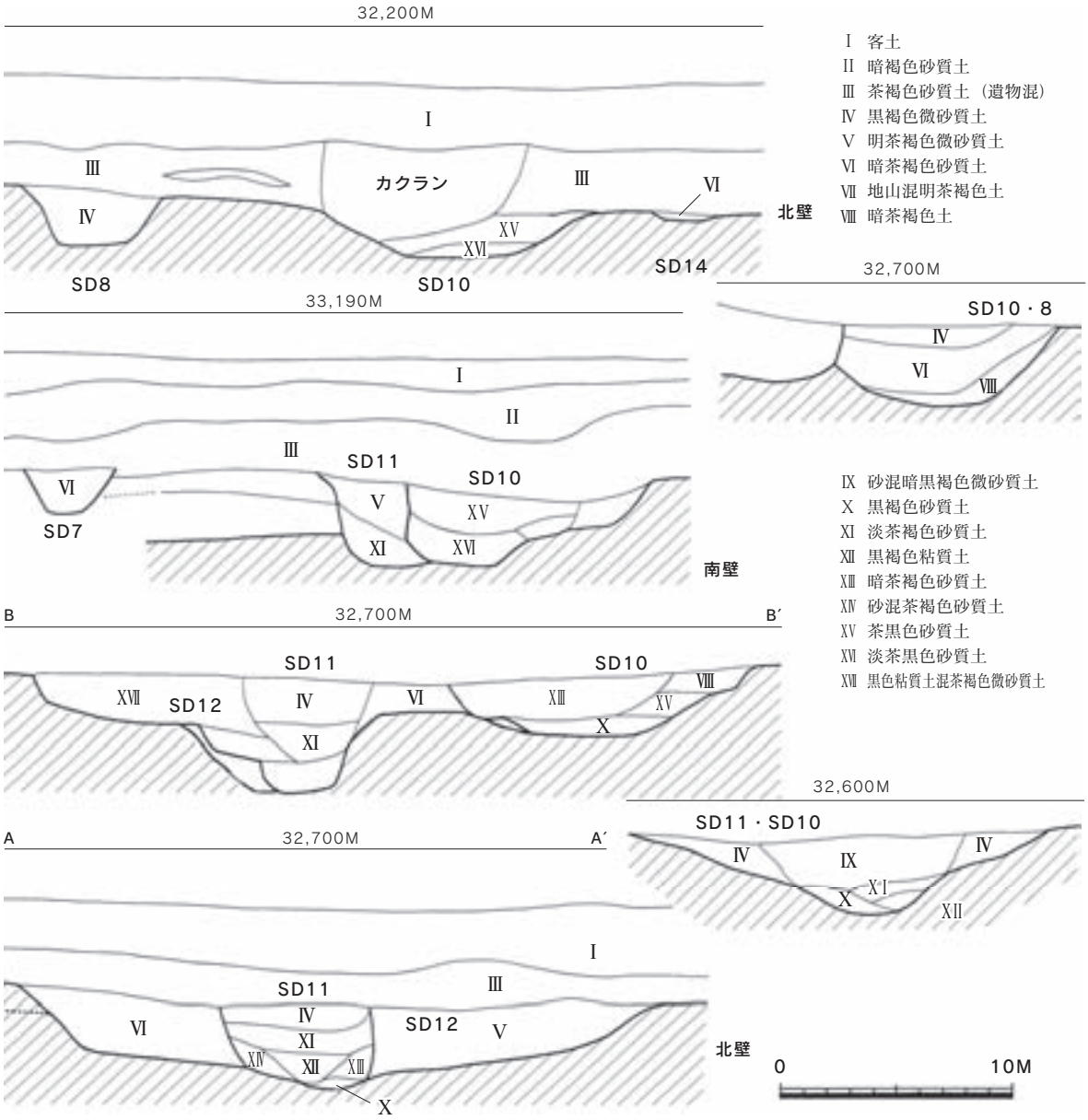


Fig.10　土層実測図（S1/30）

出土遺物（Fig.11・12、PL.7） **17**は、口径11.6㎝、底径8.4㎝、器高3.95㎝の土師器の坏a。内外ともに摩耗が著しく、調整は不明。色調は内外とも灰白色N7/をなす。胎土に砂粒を多量に含んで、焼成は普通。**18**、復元口径13㎝、底径6.8㎝、器高3.95㎝を測る土師器坏a。器表は摩滅が著しい。内面にぶい橙色5YR7/4、外面橙色5YR6/6の色調を呈す。胎土には石英・雲母片・赤褐色粒を含み、焼成はあまい。内面口縁付近に煤が付着している。**17・18**はSD10の中央部から出土した。土師器の坏aは復元口径13.4㎝、底径7.6㎝、器高3.6㎝を測る**19**の内外の色調は、ともに橙色5YR7/8を呈す。体部の内面は不定方向のナデ、外体部はヨコナデ調整がなされる。底部はヘラ切り離し後ナデによる仕上げだが、一部は雑なナデとなる。底部に煤が付着している。**20**はSD10の北端で出土した須恵器の坏cで、復元高台径9㎝、器高4.25㎝を測る。灰白色5Y8/1の色調を内外ともになす。胎土に石英粒を含み、焼成は良い。**21**は須恵器蓋c。復元口径15.8㎝、器高2.5㎝、つまみ径2㎝を測り、内外ともに灰白色7.5Y8/2の色調を呈す。調整は内外ともナデによる仕上げ。胎土には細砂粒を含み、焼成は普通。ロクロ回転は右方向である。**22**の須恵器杯aは、口径13.6㎝、底径8.8㎝、器高3.5㎝を測る。色調は内外ともに灰白色N7/をなす。胎土に細砂粒を含んで、焼成は普通となる。内外ともにナデで調整、外底面はヘラ切り離し後ナデ仕上げされる。**23**は須恵器中皿aで、復元口径12.4㎝、底径6.1㎝、器高1.9㎝となる。内面は灰色N5/、外面灰色N4/の色調をなす。調整は内外ともにナデによる仕上げ。内体部の一部に灰がかかっている。胎土に石英・雲母を含んでいるが、焼成は良い。**24**は、復元口径18.4㎝、復元底径14.8㎝、器高2㎝の土師器中皿a。外底面は回転ヘラ切り後、雑な不定方向のナデによる仕上げ。外体部から内体部は回転ナデにて調整。色調は内外ともに灰色5Y6/1と暗灰色N3/となる。胎土に白色粒を多く含むが、焼成は良好。**25**は溝の北端で出土した口径19.7㎝、底径16.4㎝、器高2.4㎝の須恵器中皿a。内外ともに灰白色2.5YR8/1の色調を呈す。内底面の調整は一定方向のナデ、内外の体部はヨコナデによる仕上げを施している。外底面はヘラによる切り離し後、ナデにより仕上げ。ロクロ回転は右回りである。胎土に僅かに細砂粒を含むが、焼成は普通。**26**は復元口径22㎝、高台径16.7㎝、器高4.65㎝を測る須恵器大杯c。色調は内面灰白色N8/、外面は灰白色N7/で、内外ともにナデにより調整。胎土に3㎜以下の石英や雲母片が含まれるが、焼成は良い。**27**は、越州窯系の青磁椀の底部付近の破片。残存器高1.9㎝、内外面に施釉がされるが、高台部分は一部の釉を掻き落している。胎土は灰白色N8/で砂粒は含まないがやや粗い、釉調はオリーブ黄7.5Y6/3である。**28**は土師器の甑で取手部分から体部下位までの破片で口縁部・底部付近を欠損する。残存器高20㎝、外面浅黄橙色10YR8/4で内面灰白色10YR8/2の色調を呈す。内面の調整はヘラケズリで一部にハケ目を施し、粘土の接合痕が見られる。外面取手部分は指頭によるナデ、体部はヘラケズリによる調整が施され、体部下位に煤が付着している。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含んでいて、焼成は普通となる。**17・26**は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期、**18・20**は大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期に**19・21～25**は大宰府編年のⅥA期に該当する。

SD11　SD10の西側に位置し、SD10に切られSD12を切る。SD8・SD18と並行し、主軸はN-41°-WにとりSD10からは大きく西に振る。検出長11m、幅60～80㎝、深さ50㎝前後を測る。溝は「U」字状の断面形状をなし、平面はやや蛇行するが、総体的には直進する溝で調査区の南側でSD10・SD11・SD12の３条の溝が重複する。**Fig.10**のA～A′のSD12・SD11を示す層序は、最上層に黒褐色微砂質土、２層目に淡茶褐色砂質土、３層目に暗茶褐色砂質土、４層目に黒褐色砂質土、５層目に黒褐色粘質土、６層目に砂混の茶褐色砂土となり、掘り直しが行われた事を示す。B～B′間の土層SD12のフラット面をSD10が、また南壁ではSD11を切ってSD10が掘られている事とSD12はこの土層にはなく、西に確実に曲がった事が確認できる。ここでの層序は上層に茶褐色砂質土（遺物混）、下層は暗茶褐色砂質土となる。

出土遺物（Fig.13-29）

29は丸瓦片。表面はタタキ後ナデにより調整。裏面に布目痕がのこる。残存長9.3㎝、11.2㎝、厚み2.1㎝を測る。表裏面ともに灰色N6/4と部分的に灰白色2.5Y8/1の色調をなす。胎土に細砂粒と細かな雲母を多く含むが、焼成は良い。

SD12　SD3・7・8・9・10・11、SK3に切られる。調査区北北西から9.5m直進し、ここから東の方向に緩やかに弧を描き、平面は緩やかな「く」の字状となる。検出長14.5mで、溝幅は北側部分で2.7mを測るが、幅２mとせまくなりながら延びる。北側は条107次SD31へ、さらに条200次SD2へと続く。深さは40㎝前後で、断面は幅広の「U」字状となる。溝埋土は、茶褐色砂質土の単一層となる。溝の北側では遺物はあまり出土せず屈曲部分に集中する。

出土遺物（Fig.14、PL.8）

30は残存器高6.9㎝、底径4㎝を測る甕の底部片。内面灰白色10YR8/1、外面浅黄橙色10YR8/3の色調をなす。胎土に砂粒・雲母片を含むが焼成は普通。内面はハケによる調整、外面はヘラケズリ後ナデ

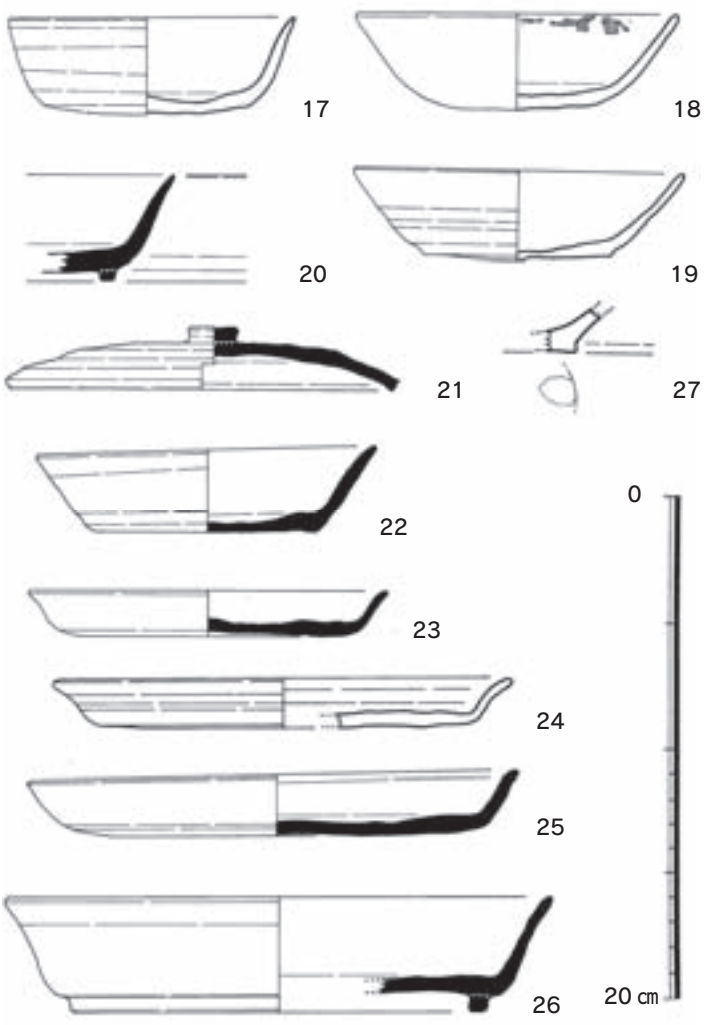


Fig.11　SD10出土遺物実測図（S1/3）

により調整される。底面は僅かに丸味を残す。**31**は残存器高10.4㎝の土師器の甕口縁付近の破片で、口縁から体部へは「く」の字になる。内外面とも、にぶい黄橙色10YR7/3の色調をなす。胎土には、3㎜程度の石英・雲母・赤褐色粒を含み焼成は良い。最大径が口縁端部にあり、内体部上位はケズリで、口縁部はハケ目で、外面体部はハケによる調整となる。外体部に煤が付着している。**30・31**はともに弥生終末期のもの。**32**は甕の口縁部片で復元口径27.2㎝、残存高5㎝を測る。内面は橙色5YR7/6、外面7.5YR7/6の色調を呈す。内体部はケズリで、外体部から内面口縁部までは、ヨコナデ調整。**33**は残存高18㎝、復元口径27.2㎝の土師器甕の破片。内外面ともに橙色7.5YR7/6、一部浅黄橙色7.5YR8/6の色調をなす。**32**は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期の所産で33はⅣ・Ⅴ期の所産で、30・31は遺物取り上げの際に混じった可能性がある。

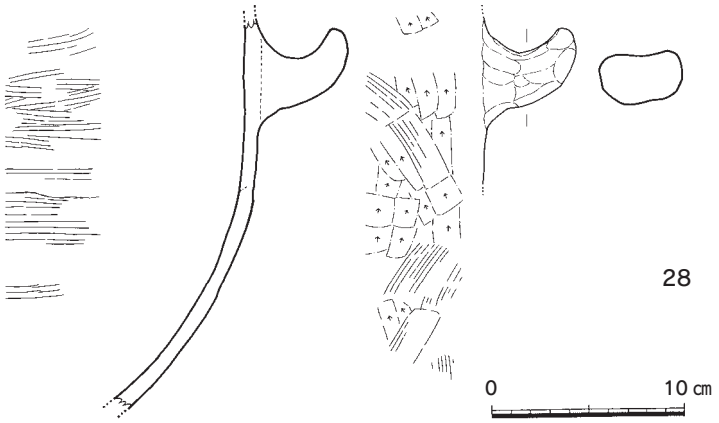


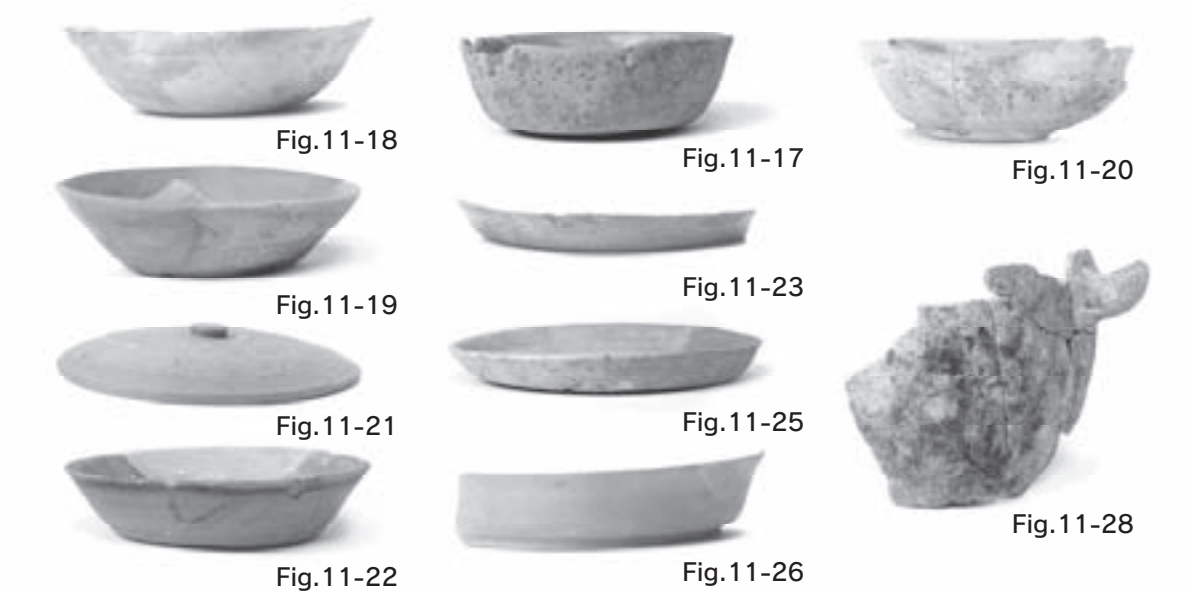
Fig.12　SD10出土遺物実測図（S1/4）

SD13　SD4の西側SK6に切られ土坑状の遺構を切る。主軸はN-12°-Eにとり、検出長1.6ｍ、幅50㎝、深さ20㎝を測り、断面は逆台形状となる。出土遺物はなく、時期も不明。

SD14　SK4・5に切られる。未調査区との境界にあり、完掘できず詳細は不明。

SD15　SD10・SD8の間に所在する。詳細は不明。

SD16　調査区南端中央部に位置し、SD10に切られる。遺構の西側部分しか検出できず詳細は不明。図示できる遺物は**Fig.15-34**のみ。**34**は土師器坏dで、復元口径12.6㎝、底径7.2㎝、器高2.45㎝を測る。内外ともに橙色2.5YR6/8の色調をなす。胎土



PL.7　SD10出土遺物

に2㎜以下の石英･雲母・赤褐色粒を含んで、焼成は良い。調整は内外ともにミガキが施される。ロクロ回転は右方向である。大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期のもの。

SD17　SD18の東側に位置し、SK10・12・13・18とSE9に切られる。検出長5.5ｍを測る。幅・平面形状・断面形状は遺構が部分的な検出のため不明。検出した西側部分の深さは28㎝前後を測る。

出土遺物（Fig.15-35･36）35は白磁の椀の口縁付近の破片。残存器高2.6㎝で、胎土は灰白色N8/をなし、砂粒も含まず精緻である。釉は灰白色7.5Y8/1の色調で内外ともに施釉される。白磁Ｖ類３ａ。**36**は緑釉陶器の椀の底部片。復元底径7.4㎝、現存器高1.8㎝を測る。胎土は灰白色10YR8/2で、僅かに砂粒を含んでいる。器表の摩滅が著しく、釉は剥落するが、遺存する部分から釉はオリーブ灰10Y6/2の色調をなし、透明で光沢のある釉である。釉は全面に薄く施釉されている。高台部分は低く、外に張り出したものを貼り付けている。近江産のもの。**37**は土錘で現存長5.85㎝、径2.4㎝を測る。色調は橙色5YR7/6、一部にぶい黄橙色10YR7/4をなし、胎土に微細な雲母片が含まれるが砂粒は、ほとんど含まず焼成は良好。**38**は細粒砂岩製の砥石片。全面を砥面とする。表・裏面はよく使用し、凹んでいる。現存長

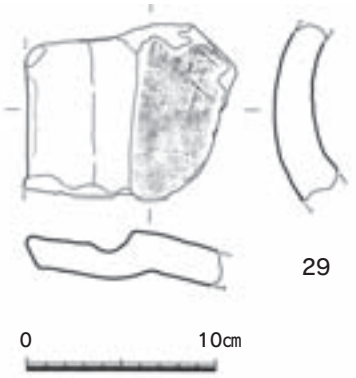


Fig.13 SD11出土遺物実測図（S1/4）

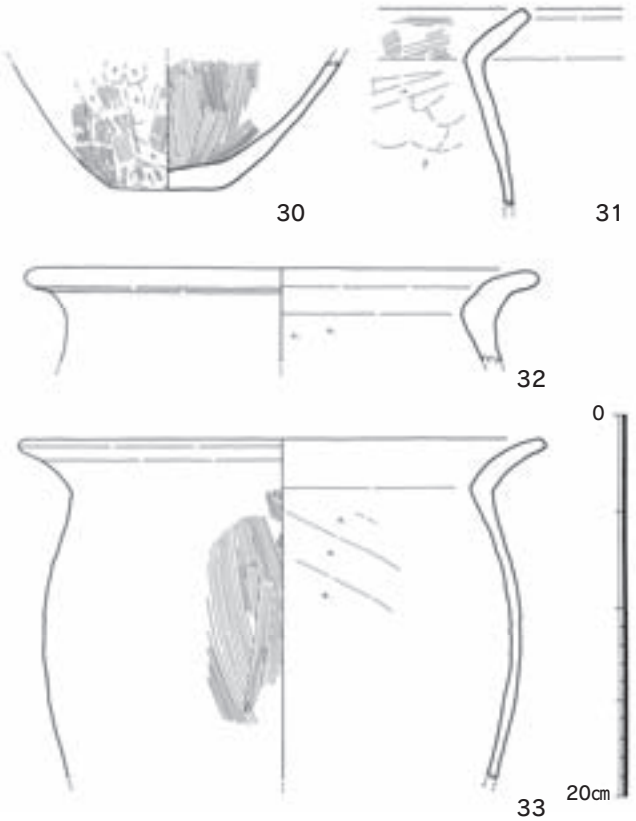


Fig.14　SD12出土遺物実測図（S1/4）

Fig.14-30

Fig.14-31

Fig.14-32

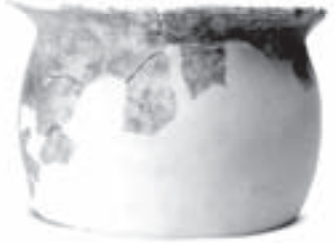


Fig.14-33

PL.8　SD12出土遺物

9.65㎝、幅4.75㎝、厚み2.6㎝である。**39**、須恵器の大蓋ｃで復元口径20.4㎝、残存器高2.6㎝となる。内外面は灰白色2.5Y7/1の色調をなす。外天井部から内面体部までは回転ナデによる調整が施される。胎土に3㎜以下の石英粒を僅かに含むが、焼成は良い。須恵器の蓋ｃの**40**は、復元口径14.3㎝、残存高0.8㎝を測る。内面の色調は灰色N5/、外面の色調はN6/を呈し、胎土には2㎜以下の石英と少量の黒色粒を含み、焼成は良い。外天井部は回転ヘラケズリ、外体部から内体部は回転ナデによる調整。**41**は須恵器蓋ｃ。復元口径16.1㎝、残存高2.1㎝で高さのある蓋となる。内外面ともに灰色5Y6/の色調をなす。焼成は良いが、胎土に3㎜以下の石英を含んでいる。僅かに口径に歪みがある。**42**は、復元口径12.4㎝、底径7.8㎝、器高3.6㎝の土師器坏a。器表は摩滅が著しい。内外面は灰白色10YR8/2の色調を呈す。胎土に3㎜以下の石英を含んで、焼成は良い。**43**は、復元口径12.6㎝、底径8.3㎝、器高3.8㎝を測る須恵器坏a。色調は内外ともに灰白色5Y7/1を呈す。胎土に3㎜以下の石英を含んでいるが、焼成は良い。**44**は、口径10.3㎝、高台径6㎝、器高4.4㎝の須恵器小坏aで、色調は内面灰白色N7/、外面灰色N5/を呈す。胎土に4㎜以下の石英・雲母を含み、焼成は良い。須恵器中皿aの**45**は、復元口径15.8㎝、底径13㎝、器高2.6㎝を測る。内外面ともに灰白色2.5Y8/1の色調をなす。胎土に4㎜以下の石英・雲母を含んでいて焼成は良い。体部内外の調整は回転ナデ、外底面はヘラ切り離し後ナデが施されている。**46**は、底径7.6㎝、残存高3.5㎝の土師器坏aの小片。内面橙色5YR7/6、外面にぶい橙色7.5YR7/4の色調をなす。胎土に細砂粒と雲母を含む。焼成は良いが、器表の摩滅が著しく調整は不明。**47**の須恵器中皿aの小片で、残存高2.3㎝底径12.8㎝となる。内外面ともに灰色N6/の色調を呈す。胎土に3㎜以下の石英を含むが、焼成は良い。内外の体部は回転ナデが施される。**48**は、残存高2.6㎝、底径7.2㎝須恵器中皿a。色調、内外面ともに灰白色N7/を呈す。胎土に2㎜の石英・黒色粒・雲母を含むが、焼成は良い。調整は内外面の体部は回転ナデを底面の内外はナデによる仕上げとなる。**49**も須恵器中皿a。復元口径15㎝、復元底径11.8㎝、器高2.1㎝を測る。内外面ともに灰白色10YR8/1の色調をなす。胎土に細砂粒を含み、焼成は普通。内外面はナデによる調整、底部はヘラ切り離し後ナデによる仕上げ。底面には板状圧痕がのこる。ロクロ回転は右回りである。**50**は復元口径17.6㎝、復元底径12㎝、器高2.8㎝の土師器中皿a。内外ともに浅黄橙色10YR8/4を呈す。胎土に細砂粒･赤褐色粒を含み、焼成は普通。調整は内外ともナデ、

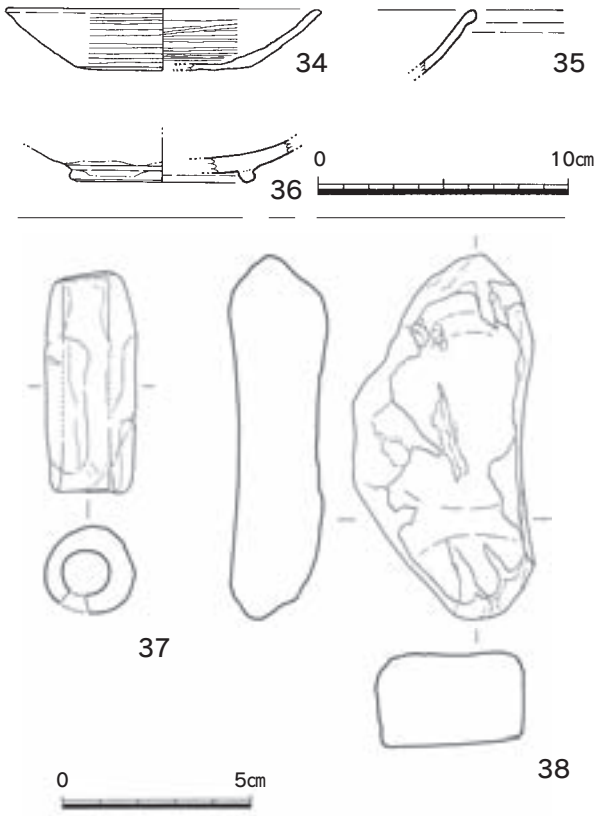


Fig.15　SD17出土遺物実測図（S1/2・S1/3）

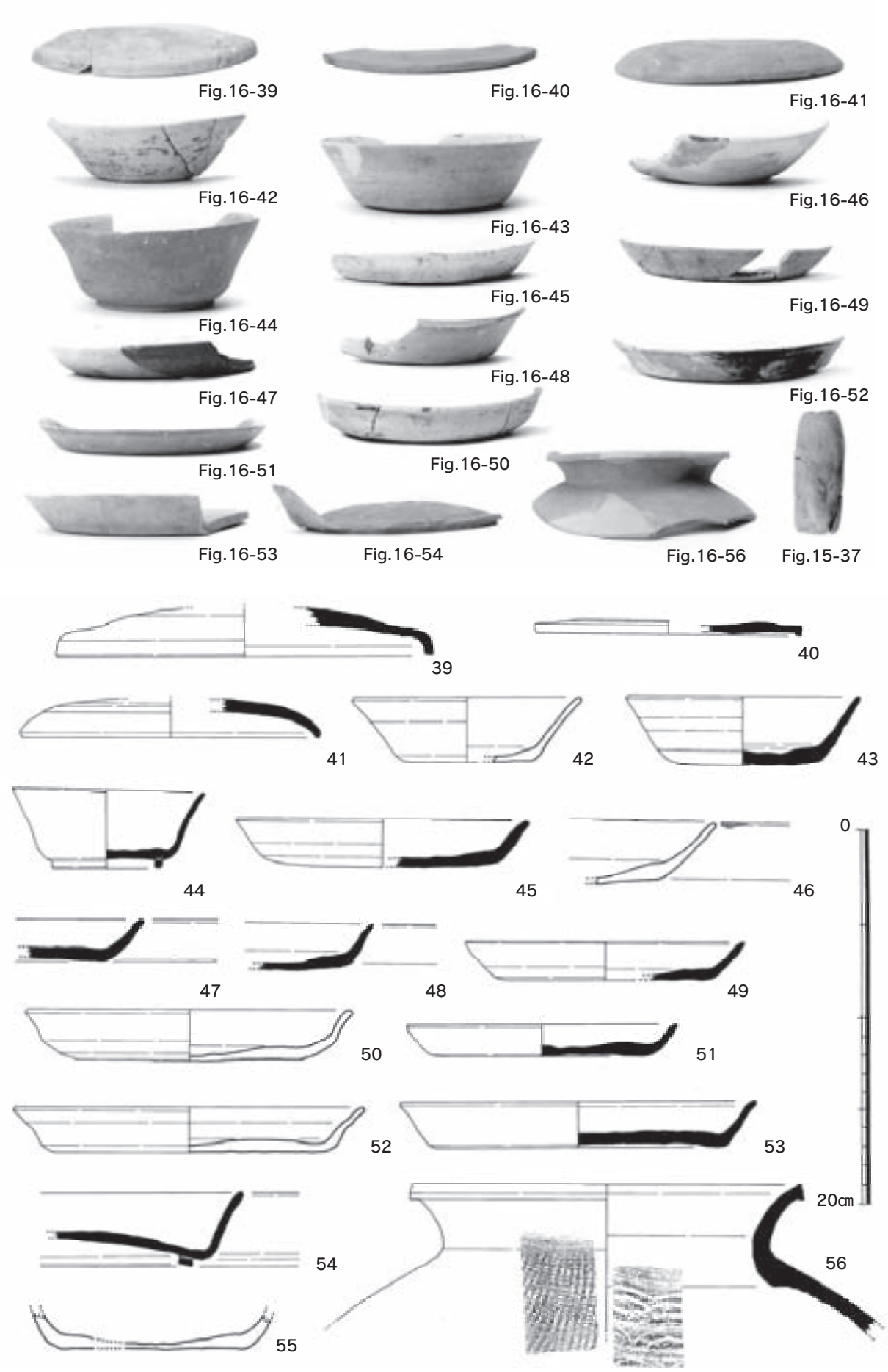


Fig.16　SD17出土遺物実測図（S1/3）

外底面はヘラケズリが施され、外面口縁付近に黒斑が見られる。**51**は復元口径14.6㎝、底径12㎝、器高1.7㎝の須恵器の中皿a。内外面は灰色N5/の色調をなす。内面から外面体部は回転ナデ、外底面はヘラ切り後ナデにて調整。胎土に2㎜以下の石英・黒色粒を含み焼成は良い。**52**、復元口径19㎝、復元底径14.8㎝、器高2.5㎝の土師器の皿a。色調は内外面とも浅黄橙色10YR8/4をなす。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、焼成は普通。内底面は不定方向のナデ、内外体部はヨコナデを施す。外底面はヘラケズリによる仕上げ。**53**は、復元口径19.2㎝、底径16.2㎝、器高2.5㎝の須恵器の皿a。内外面は灰白色7.5Y7/1の色調を呈す。胎土に2㎜以下の石英・黒色粒を含んで焼成は良い。内底面はナデ、内外体部は回転ナデで、外底面はヘラ切り離し後ナデ調整。**54**は須恵器の盤aで残存高４㎝、底径17.5㎝を測る。色調は内外ともに灰色N5/を呈す。胎土に2㎜以下の石英・黒色粒を含み焼成は良い。調整は内外底面はナデ仕上げ、内外面の体部は回転ナデ。**55**は底径10.2㎝、残存高2㎝の土師器坏の底部片。内面橙色5YR6/6、外面にぶい橙色7.5YR7/3の色調をなす。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、焼成は良いが、内外面の摩滅は著しく調整は不明瞭。底面はヘラ切りでロクロ回転は右方向となる。**56**は須恵器小甕aの口縁部片で復元口径11㎝、残存高8.1㎝。内面は灰褐色7.5YR5/2、外面灰褐色10YR6/2で胎土には少量の石英を含み焼成は良いが、やや歪である。外面は格子のタタキ、内面はタタキ後ナデによる調整。**39・41・47・50・52・53**は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期、**44～46・48～51・54・56**は大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期、**40・42・43**は大宰府編年ⅥA期。

③ＳＥ（井戸跡）

井戸は10基検出できた。ほとんどの井戸は調査区の西側に集中する。

ＳＥ１　SE4の南、現代の井戸に切られる。掘り方は長軸1.2ｍ、幅1ｍ前後の楕円形プランをなす。深さは1.2ｍと浅い。井戸枠木は確認できなかった。出土遺物は砕片が多く、**Fig.18-68**だけが図示できた。**68**は須恵質の平瓦片で残存長11.1㎝、

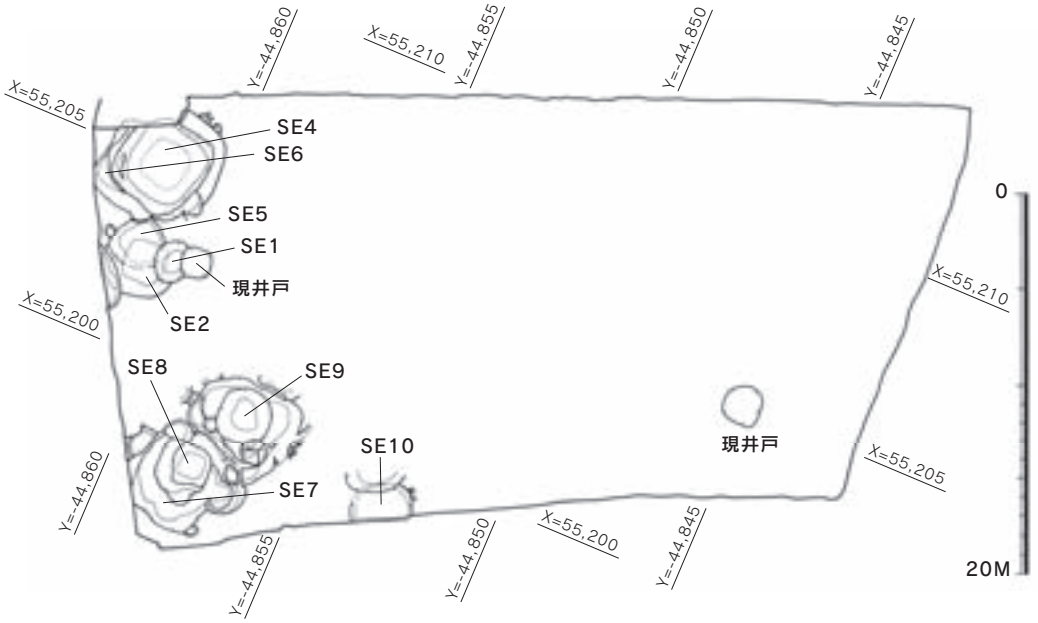
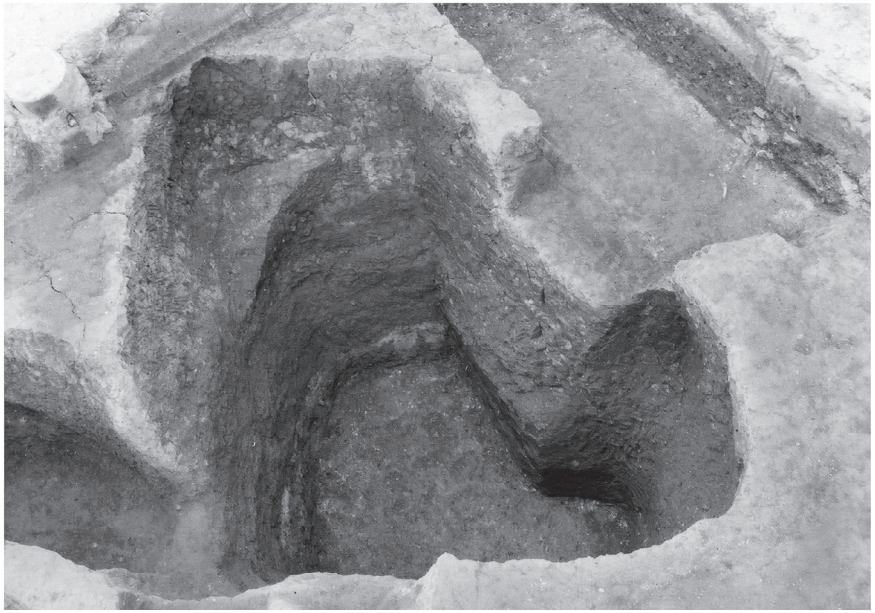


Fig.17　SE位置図（S1/200）

SE1

SE2



SE4

SE8

PL.10　SE

幅9.5㎝、厚み2.8㎝で、灰黄色2.5Y7/2と一部灰褐色2.5YR6/2の色調をなす。胎土には細砂粒を含んでいる。**Fig.18-65**は長さ4.8㎝、最大径1.5㎝の土錘。浅黄橙色10YR8/3に色調を呈し、焼成は良い。

SE2　SK11を切り、SE1・5に切られる。掘り方は長軸1.35m、短軸1.2mの不整な長方形をなす。井枠痕跡は一辺0.7mの方形プランで、深さ1.15mを測る。

出土遺物（Fig.18-58・59・61～64・66・67、Fig.21-74・77、PL.12・13）

58は須恵器坏a。復元口径13.2㎝、復元底径8㎝、器高3.45㎝で、内外とも灰白色N7/の色調をなす。**59**、緑釉緑彩壷の肩付近の小片で残存高4.5㎝を測る。施釉は外面のみ薄くかかり一部流れて厚くなる。**61**は緑釉陶器坏の底部片で軟質である。釉は不透明でやや光沢があり、全面に施釉。**62**は越州窯系の青磁椀で復元高台径8.6㎝、器高3.4㎝を測り、内面に目跡が残る。釉は畳付部分を除き全面に施釉され、釉の発色は悪く白っぽい。外底面は回転ヘラケズリで中央付近をくぼませている。**63**は復元高台径8.4㎝、現存器高4.8㎝の土師器椀c。高台は高く、外に広がる。**64**は復元高台径5.8㎝の越州窯系の青磁椀片。目跡は内面底面と畳付部分に残る。内面と外面体部のみに施釉。高台部分は回転ヘラケズリされる。**62・64**は椀Ⅰ類２aウに分類される。**66・67**は土錘。**66**は残存長4.5㎝、径1.35㎝で、片側の端部を欠損する。**67**は現存長4.45㎝、径1.35㎝で両端を欠損。**74**は黒色土器九州系Ⅰ類。口径12.15㎝、底径7.4㎝、器高2.55㎝を測る。内面から外体部には連続的に緻密なヘ

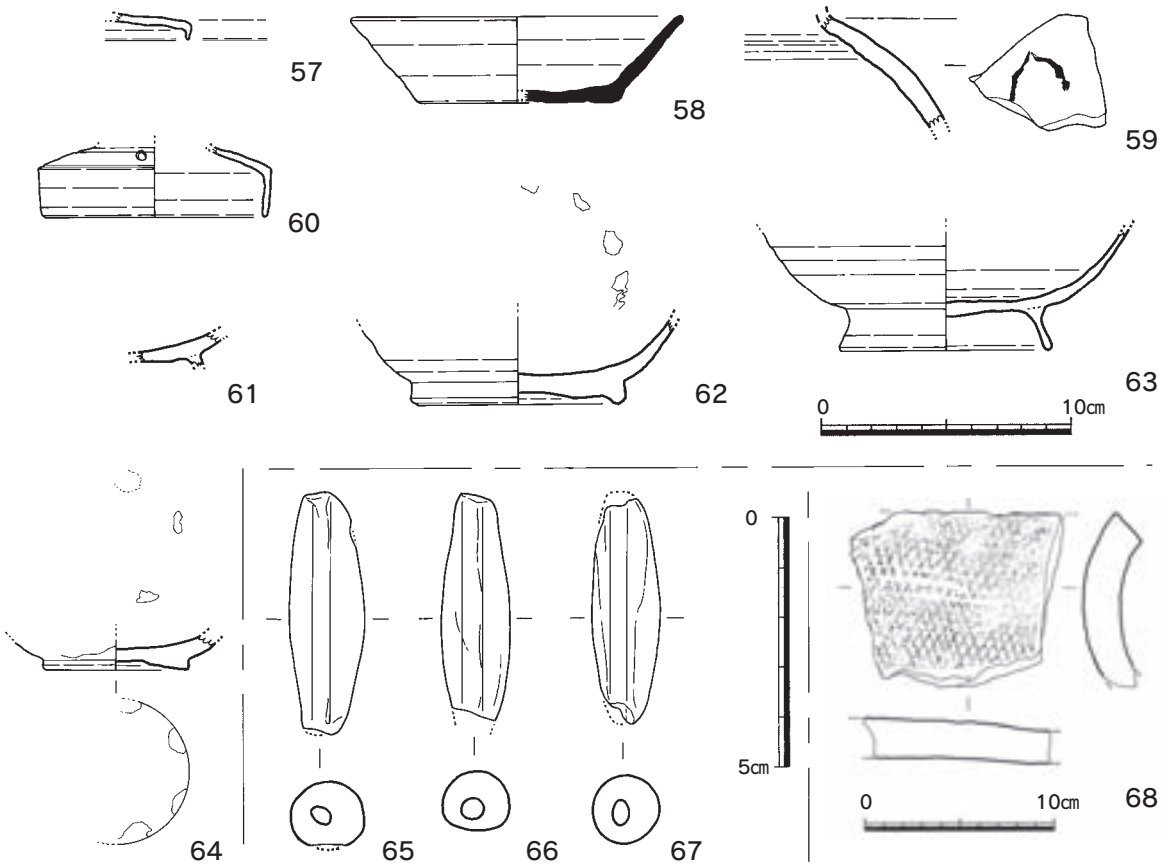


Fig.18　SE出土遺物実測図（S2/3・S1/3・S1/4）

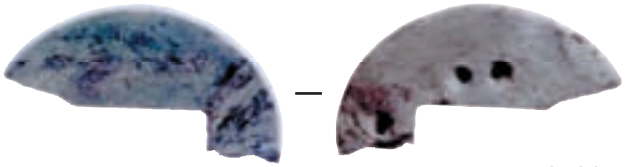


Fig.19-69

PL.11　石帯

Fig.19　SE4出土遺物実測図（S2/3）

ラミガキが施されている。外底面はヘラケズリ後ミガキで調整している。**77**は復元高台径6.2㎝、残存器高2.6㎝の緑釉陶器の皿片。内面・外面体部に施釉し、外底面は露胎で、畳付部分の釉は掻きとられている。

SE3　SE1・2・4・5に切られ、掘り方の東北側だけが遺存。詳細は不明。

出土遺物（Fig.18-68、Fig.21-78～82、Fig.22-103・105・106、PL.13･14）

68は現存長9.3㎝、幅11.1㎝、厚み2㎝の平瓦。**78**は復元口径15㎝、底径11.4㎝、器高1.85㎝の土師器中皿a。**79**は土師器坏a片で、外底面に板状圧痕がのこる。**80**は摩滅の著しい土師器中皿aの小片、外底面はハケ目がのこる。**81**は、器表の摩滅著しい土師器皿aの小片。**82**は残存高3.6㎝の土師器坏aの小片で、内外ともナデにより調整。外底面には板状圧痕がのこる。**103**は残存高8.6㎝の須恵器の甕a。内面体部には青海波、外面の上部にはカキ目、体部には平行タタキがのこる。ロクロ回転方向は右。**105**、土師器甕の口縁付近の小片。残存高4.7㎝で、内体部はケズリ、外体部にはハケ目を施す。**106**は復元口径28㎝、残存高12.5㎝を測る土師器の甕口縁部で、内体部にはケズリ、内面頸部から外面体部まではハケ目で調整。**105・106**の最大径は口縁端部にある。**103**は大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期、**78**はⅥA期、**81**はⅥB期、**82**はⅦ期に**105・106**は弥生終末のもの。

SE4　調査区西北端に位置し、SE5・6・SD18を切る。掘り方の平面は一辺2.5mの方形形状をなし、裏込めの埋土には砂礫が多く混じる。底面までの深さは2.31mを測り平坦となる。上面から1.5m前後の深さで地山が青灰色粘質土に変り、この深さで井戸枠のプランが確認できたが枠木は遺存しない。井枠痕跡の形状は一辺が1.3mの方形プランをなす。

出土遺物（Fig.18-57、Fig.19-69、Fig.20-70、Fig.21-71･72･84～93、PL.13）

57は灰釉陶器の蓋の小片。現存器高1.1㎝で、釉は内外面に施釉。釉は透明で、光沢がある。釉は内面に薄く、外面は厚くムラがある。釉調はオリーブ灰10Y5/2を呈す。胎土は緻密で灰色5Y7/1の色調となる。**69**は蛇紋

Fig.18-65　Fig.18-66　Fig.18-67

PL.12　SE出土遺物

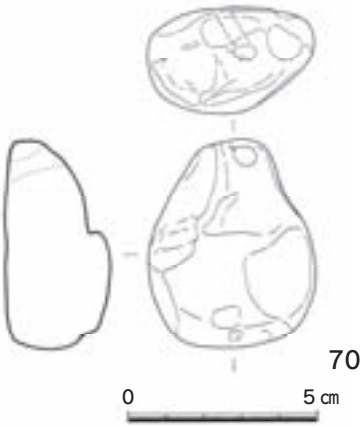


Fig.20　SE4出土遺物実測図（S1/2）

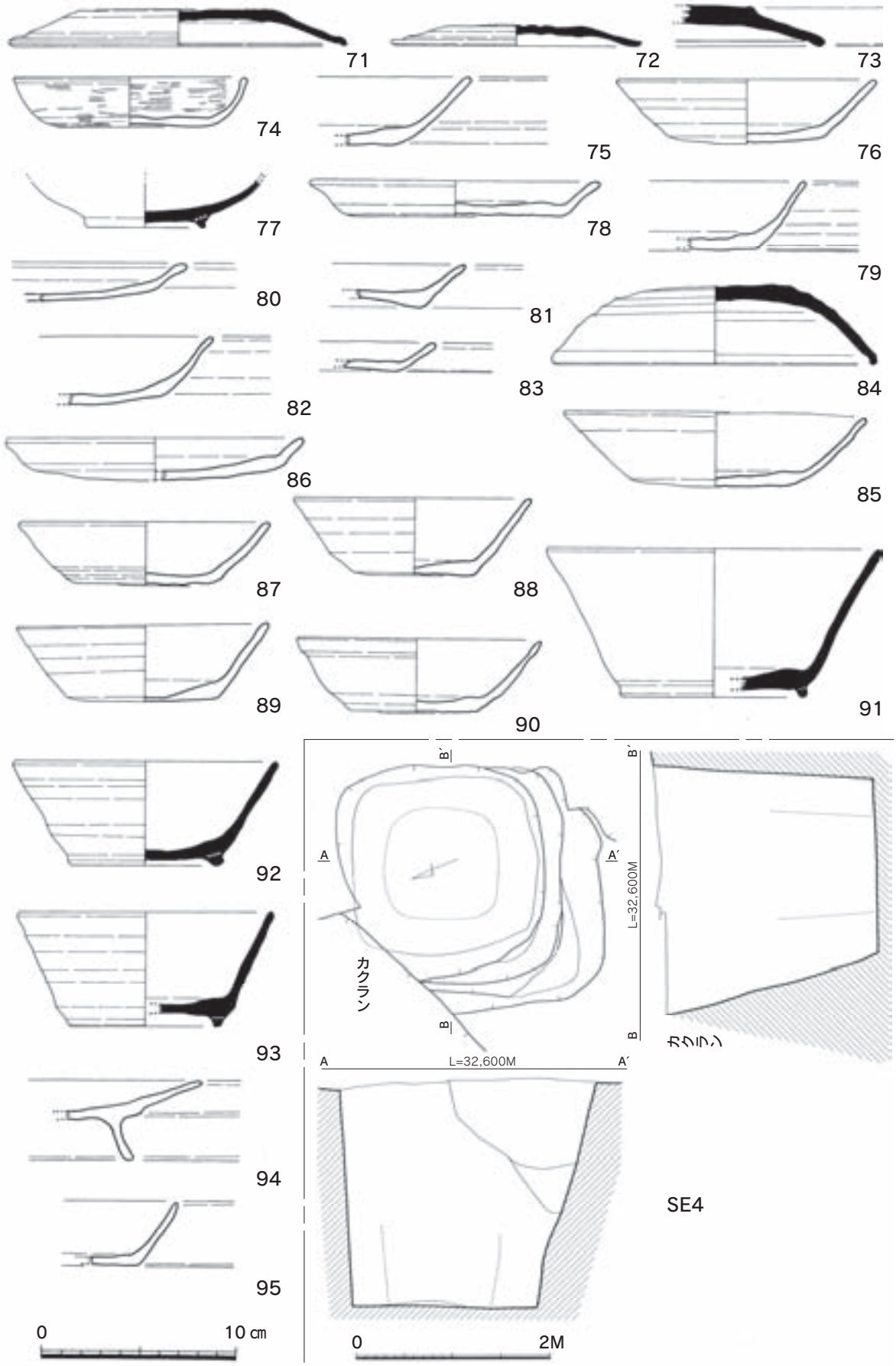
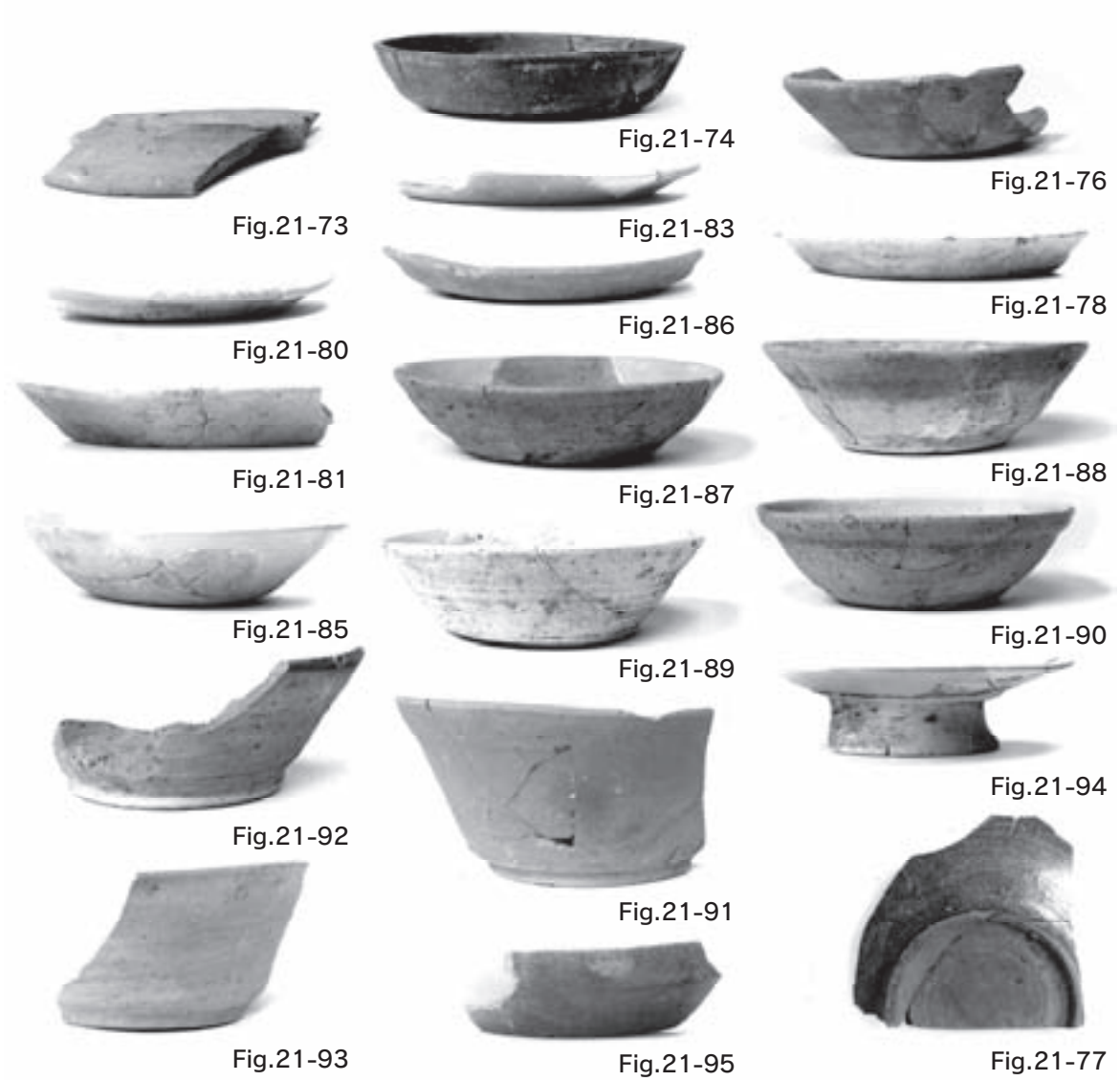


Fig.21　SE4実測図及び出土遺物実測図（S1/60・S1/3）

岩製の丸鞆で1/2を欠損する。表面は丁寧に磨かれて平滑である。中央部に正方形か長方形の孔があき、かがり孔が３ヶ所のこる。現存長1.8㎝、幅3.2㎝、厚み0.5㎝を測る。**70**は瓦を転用した権で長さ5.5㎝、幅4.4㎝、厚み2.8㎝、重さ54.6ｇを測る。**71**は口径17.5㎝、器高1.9㎝の須恵器蓋ｃ。調整は天井部をヘラ切り離し後ナデ、外体部から内面はナデで仕上げている。焼成は良い。**72**、復元口径12.9㎝、器高1.1㎝の須恵器中蓋a。調整は内外ともナデ、外天井部はヘラ切りにて仕上げる。**73**は、残存高1.15㎝の須恵器中蓋a。調整は外天井部ヘラ切り後ナデ、外体部から内面はナデによる仕上げ。**83**は器高1.5㎝、復元底径12㎝の土師器中皿a。**85**は口径15.7㎝、底径8.5㎝、器高3.9㎝の土師器坏a。**86**、復元口径17.4㎝、器高2.2㎝の土師器皿a。**87**は口径12.95㎝。底径6.9㎝、器高3.45㎝の土師器坏a。胎土に砂粒と赤褐色粒を含み、内外とも橙色5YR7/6の色調をなす。調整は外底面はヘラ切り後ナデ、他はナデによる仕上げ。**88**は復元口径12.2㎝、底径6.3㎝、器高4.1㎝の土師器坏a。調整は外底面ヘラ切り後ナデ、他はナデとなる。内面口唇付近に煤



PL.13　SE出土遺物

が付着。土師器坏aの**89**は、復元口径13.1㎝、底径7㎝、器高4.15㎝を測る。調整は底部をヘラ切り後ナデ仕上げで板状圧痕がのこる。**90**は復元口径12.6㎝、底径6.6㎝、器高3.9㎝の土師器坏aで、底面の調整はヘラ切り後ナデで仕上げる。復元口径17.4㎝、高台径9.7㎝、器高7.7㎝を測る**91**は須恵器大椀ｃ。**92**は須恵器坏ｃで、復元口径13.7㎝、高台径8.1㎝、器高5.4㎝を測る。**93**は復元口径13.3㎝、高台径8㎝、器高5.9㎝の須恵器坏ｃである。復元口径10.8㎝、残存高3.7㎝の**96**は須恵器壷aで内外の体部はタタキ後にナデにより調整されている。土師器甕の口縁部片の**98**は残存高9.9㎝を測り、内体部はヘラケズリ、外体部にはハケによる調整がなされる。**99**、残存長7.05㎝、幅8.4㎝、厚み5.9㎝の塼の破片。**100**は残存長15.8㎝、幅10㎝、厚み5.6㎝の塼である。**99・100**ともに器表は磨耗が著しい。**102**は須恵質の軒平瓦片で、文様は扁行唐草文様となる。**104**は須恵器の壷dで、復元底径17㎝、残存高13.4㎝を測る。内体部は工具によるナデ調整を施すが、指頭痕が明瞭にのこる。外体部には自然釉がかかり、外底面には同心円のタタキがのこる。大宰府編年で**98**はⅡ・Ⅲ期、**92・93・96**はⅣ・Ⅴ期、**91**はⅥA期、**86・87・88・89・90・104**はⅥB期に該当する。

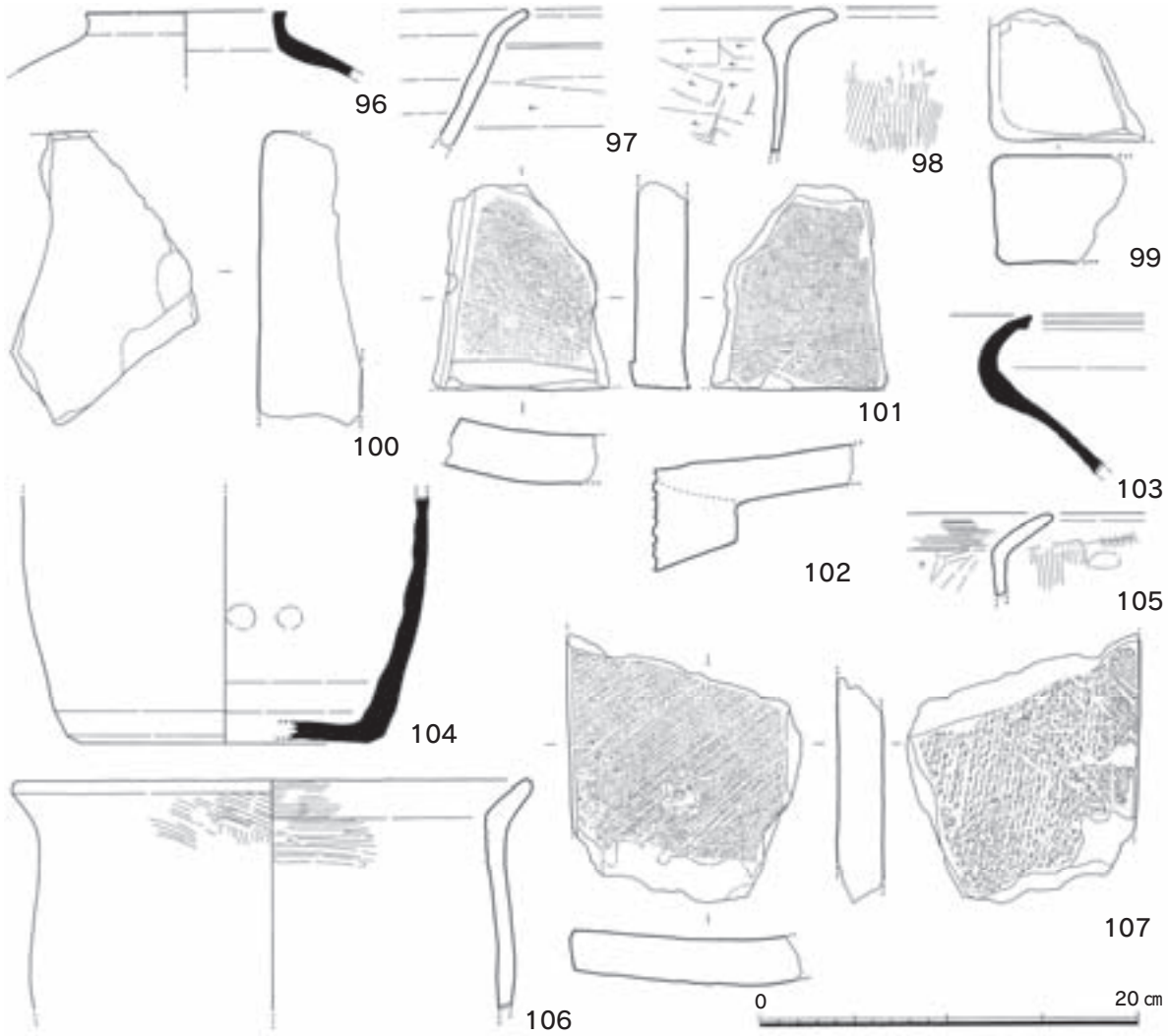


Fig.22　SE出土遺物実測図（S1/4）

Fig.22-97

Fig.22-96

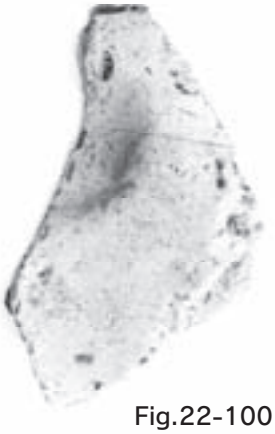


Fig.22-100

Fig.22-98

Fig.22-99

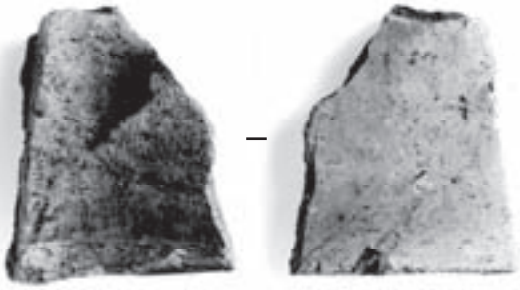


Fig.22-101

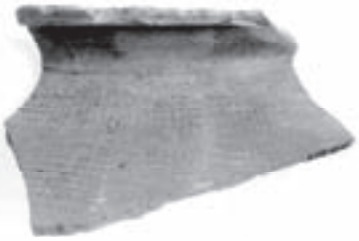


Fig.22-103

Fig.22-104

Fig.22-102

Fig.22-105

Fig.22-106

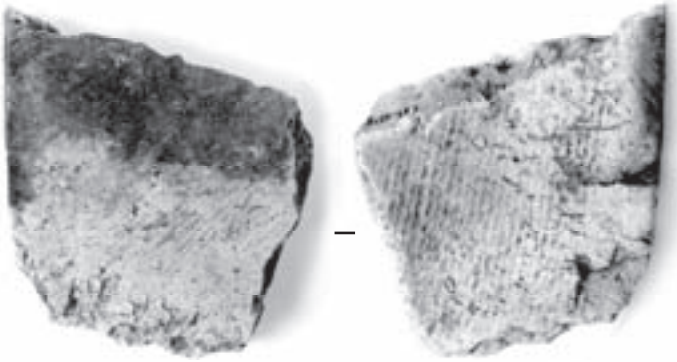


Fig.22-107

SE5　SE4の南、SE1に切られSE2を切る。長軸1.4m、短軸1.1mの楕円形の平面プランをなす。井戸枠痕跡は1.1mの方形プランで深さ1.1mと浅い。

出土遺物（Fig.18-60、Fig.21-94・95、Fig.22-97、PL.14）

60は復元口径8.6㎝、現存器高3.1㎝を測る青磁の蓋。胎土は緻密だが僅かに微細粒を含む。釉は内外ともに施釉するが、内面の釉は薄い。また釉は透明でガラス質で光沢があり、細かい貫入がはいる。**94**は復元口径14.4㎝、復元高台径8.2㎝、器高4.2㎝の土師器小皿cで、内外の器表は著しく磨耗するが、焼成は良い。胎土に5㎜以下の石英・雲母を含んでいる。**95**は土師器坏aで、復元底径8㎝、器高3.4㎝を測

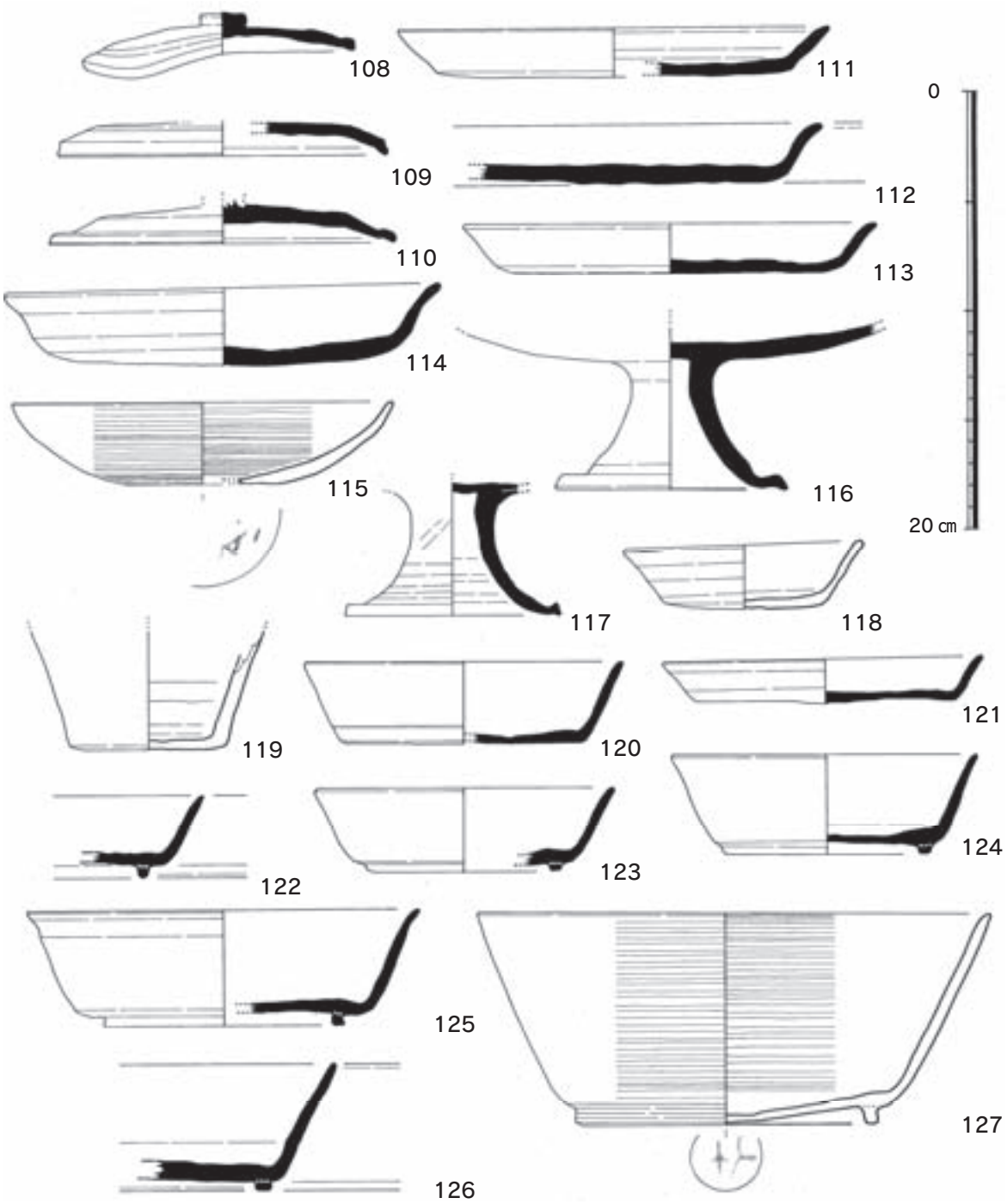


Fig.23　SE7出土遺物実測図（S1/3）

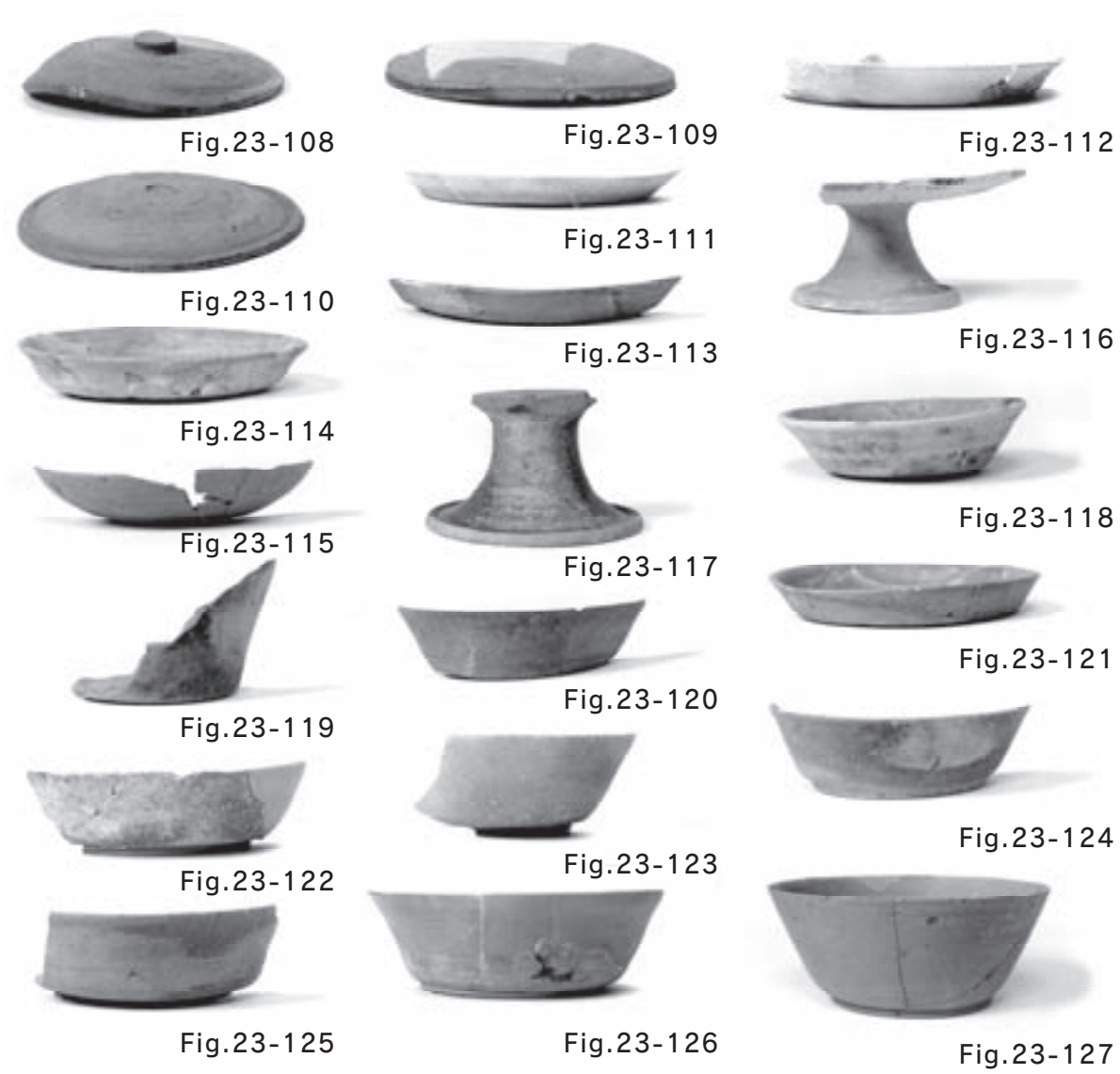
る。調整は内外ともナデによる仕上げ。**97**は残存高7.5㎝の土師器鉢片。調整は内外ともに回転ナデ調整。橙色5YR6/6の色調を内外ともになす。時期は大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期に**95・97**が、**94**はⅥA期に該当する。

SE6　SE４に切られ、西南側の一部だけが残り、プラン等の詳細は不明。深さは1.85ｍを測る。出土遺物で図示できるものはない。

SE7　調査区の南西隅に所在し、SE8に切られる。平面は長軸2.5ｍ、短軸2.1ｍの不整な長方形の形状をなす。深さは1ｍを測る。

出土遺物(Fig.23-108～110･112～116･118～121･123～127･140･142･144･146･147､PL.15)

108は歪な須恵器の中蓋ｃ。口径12.5㎝、器高3.05㎝、つまみ径2.1㎝を測る。**109**は復元口径15.2㎝、残存高1.5㎝の須恵器蓋ｃ。**110**は須恵器蓋ｃで、内面から外面体部はヨコナデを天井部はヘラ切り後ナデ調整。**112**、復元底径17㎝で器高2.7㎝を測る須恵器皿a。**113**は、復元口径19㎝、復元底径14.2㎝、器高2.3㎝を測る須恵器皿a。**114**は、復元口径20㎝、底径16㎝、器高3.65㎝の須恵器皿a。**115**の土師器大



PL.15　SE7出土遺物

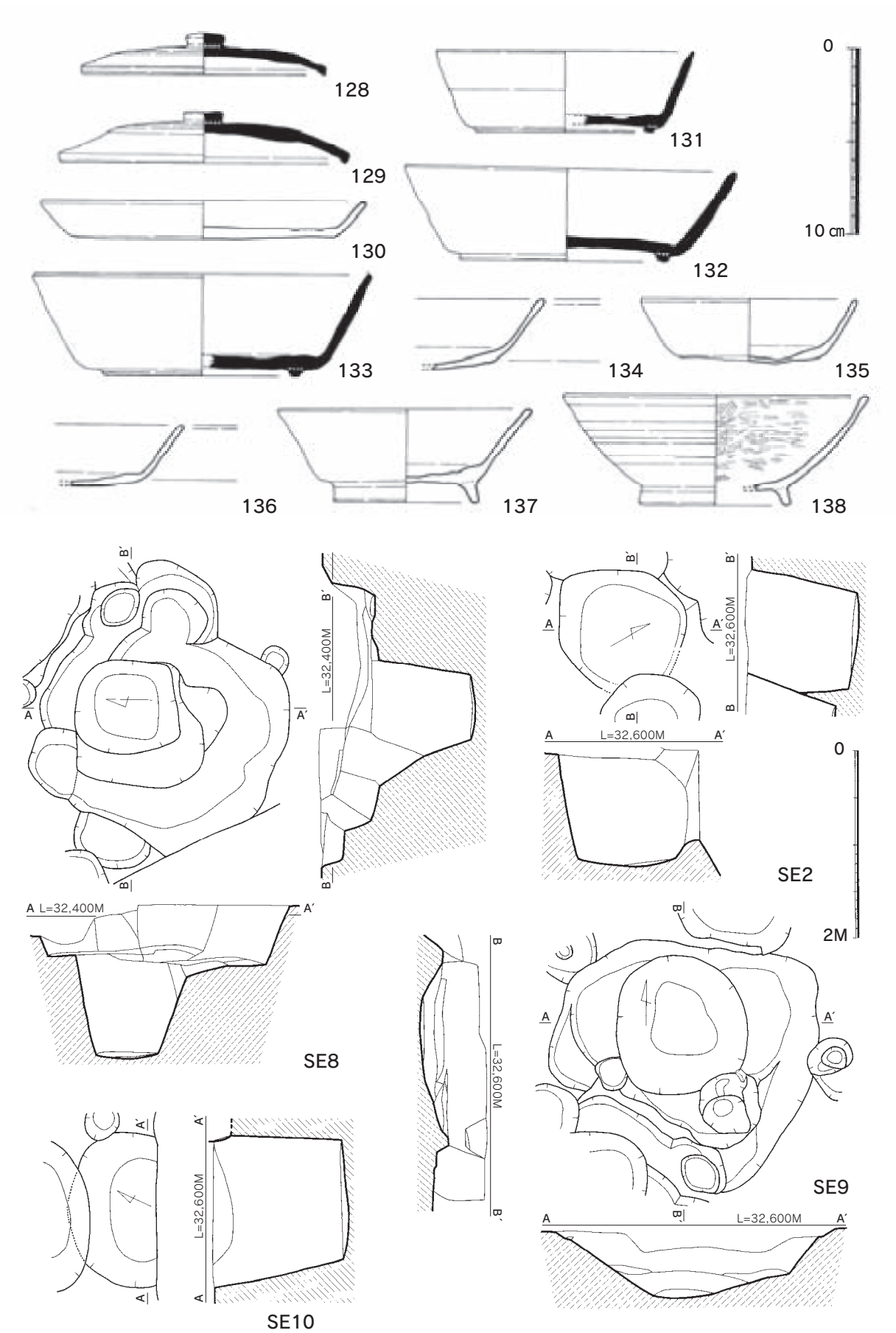
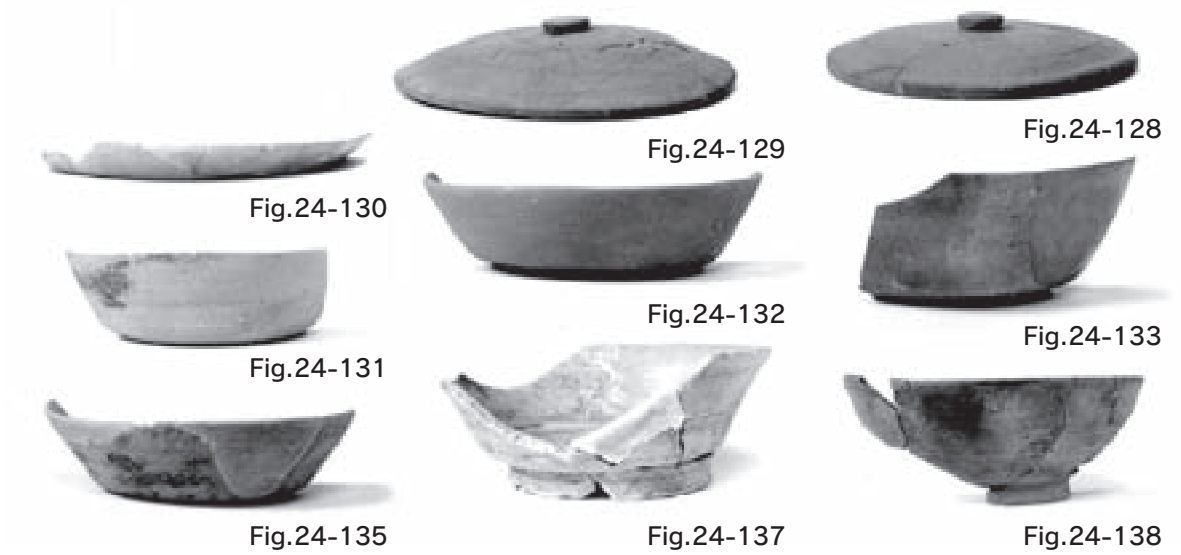


Fig.24　SE出土遺物実測図及びSE実測図（S1/3・S1/60）

坏dは復元口径17.6㎝、復元底径7.1㎝、器高3.75㎝を測る。内面の調整は回転ミガキ、外体部はケズリ後回転ミガキにて調整。底面はヘラケズリで仕上げ、墨書がのこる。**116**は須恵器の高坏aの脚部片。裾径10.55㎝、残存高7.55㎝を測り、内外の調整はナデによる仕上げでロクロ回転は右方向となる。**118**、口径11.05㎝、底径7.3㎝、器高3.25㎝の土師器坏aで、調整は外体部から内面はナデによる仕上げ。外底面には板状圧痕が残るが、ヘラ切り後ナデによる調整。**119**は土師器の鉢の底部片。**120**は須恵器坏aで復元口径14.65㎝、復元底径11.25㎝、器高3.75㎝を測る。調整は底面ヘラ切り後ナデで仕上げ。口径14.75㎝、底径12㎝、器高2.05㎝を測る須恵器中皿aの**121**は、外底面の調整はヘラ切り後ナデで内外の調整はナデの仕上げとなる。**123**は低い高台の須恵器坏ｃで、復元口径13.8㎝、高台径9㎝、器高3.9㎝を測る。調整は外底面がヘラ切り後ナデ、内外面の調整はともにナデで仕上げている。**124**、外底面をヘラ切り後ナデで、内外の調整が、ナデ仕上げされた須恵器坏ｃで外体部には自然釉がのこる。須恵器大椀ｃの**125**は、復元口径18㎝、復元高台径11.1㎝を測る。調整は内外面ナデ、外底面はヘラ切り後ナデによる仕上げとなる。**126**は焼成の良好な須恵器坏 cで高台径10.4㎝、残存高5.9㎝を測る。調整は外底面がヘラ切り後ナデ、内外面の調整はナデを施す。**127**は口径23.65㎝、高台径13.95㎝、器高9.9㎝を測る大椀ｃで、調整は内体部を回転ミガキ、外体部はケズリ後回転ミガキ、外底面はケズリで仕上げて墨書がのこる。**140・142・144**は土師器甕の口縁部片。**142**は残存高10.5㎝を測り、内体部ケズリ後ナデ、外体部はハケにて調整。最大径は胴部中位にある。**146**は須恵器壷bの頸部片で、残存高14㎝を測る。口縁端部付近にうすく自然釉がかかる。**147**は復元口径29.1㎝、残存器高9.2㎝の須恵器甕a。調整は内外の口縁部をナデ、外体部は格子のタタキ、内体部は同心円の当て具痕がのこる。**112～114・116・119・124・125・142・144・146**は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期に該当。Ⅳ・Ⅴ期は**119・115・118・120・121・123・126・127・147**が、ⅥA期には**108・109**が該当する。



PL.16　SE出土遺物

SE8　調査区南西隅SE7を切る。掘り方は長軸2.2m、短軸2m、深さ0.6mのフラット面を持つ不整な楕円形の形状で底面までの深さ1.7mを測り、枠木は遺存しない。井戸の平面は1.3mの方形プランをなす。

出土遺物(Fig.23-111･117･122､Fig.24-128～133､Fig.25-145･147､PL.15･16･17)

111は復元口径19.8㎝、復元底径16.4㎝、器高2.3㎝を測る須恵器の皿aで、内外面の調整はナデによる仕上げ。**117**、須恵器高坏aの脚部片で裾部径9.9㎝、残存高6.1㎝を測り、内面の調整はシボリ痕跡をのこすがナデ仕上げとなる。**128**は口径13.1㎝、器高2.2㎝、つまみ径2.05㎝の須恵器蓋ｃ。内面から外体面まではナデ、外天井部はケズリにて調整。**129**は口径15.35㎝、器高2.75㎝、つまみ径2.1㎝の須恵器蓋c。調整は内面から外体部はナデ、外天井部はケズリで仕上げる。ロクロ回転は左方向となる。**130**は土師器皿aで、復元口径17.4㎝、底径14㎝、器高2.1㎝を測る。調整は外底面をヘラおこし、内外体部はヘラケズリによる仕上げ。**131**は復元口径13.9㎝、復元高台径9.6㎝、器高4.4㎝の須恵器坏ｃ。調整は外底面をヘラ切り後ナデ、高台から内面まではナデで仕上げる。**132**、口径17.8㎝、高台径11.3㎝、器高5.2㎝を測る須恵器坏ｃで、調整は内外ともナデによる仕上げ。**133**は復元口径18.2㎝、復元高台径10.6㎝、器高5.5㎝の須恵器坏ｃ。 調整は内外ともナデで仕上げている。**145**、残存高12.6㎝の土師器甕の口縁部片。**148**は復元口径26.6㎝、残存高6.8㎝の土師器甕口縁部片。時期は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期に**111・117・130・148**が該当し、Ⅳ・Ⅴ期に**122・128・129・131～133**が該当する。

SE9　SE8の北側に位置し、SE8・10に切られる。掘り方は長軸3m、短軸2.5＋αmを測り、井戸枠のプランは長軸1.5m、短軸1mの不整な隅丸方形を呈す。深さは

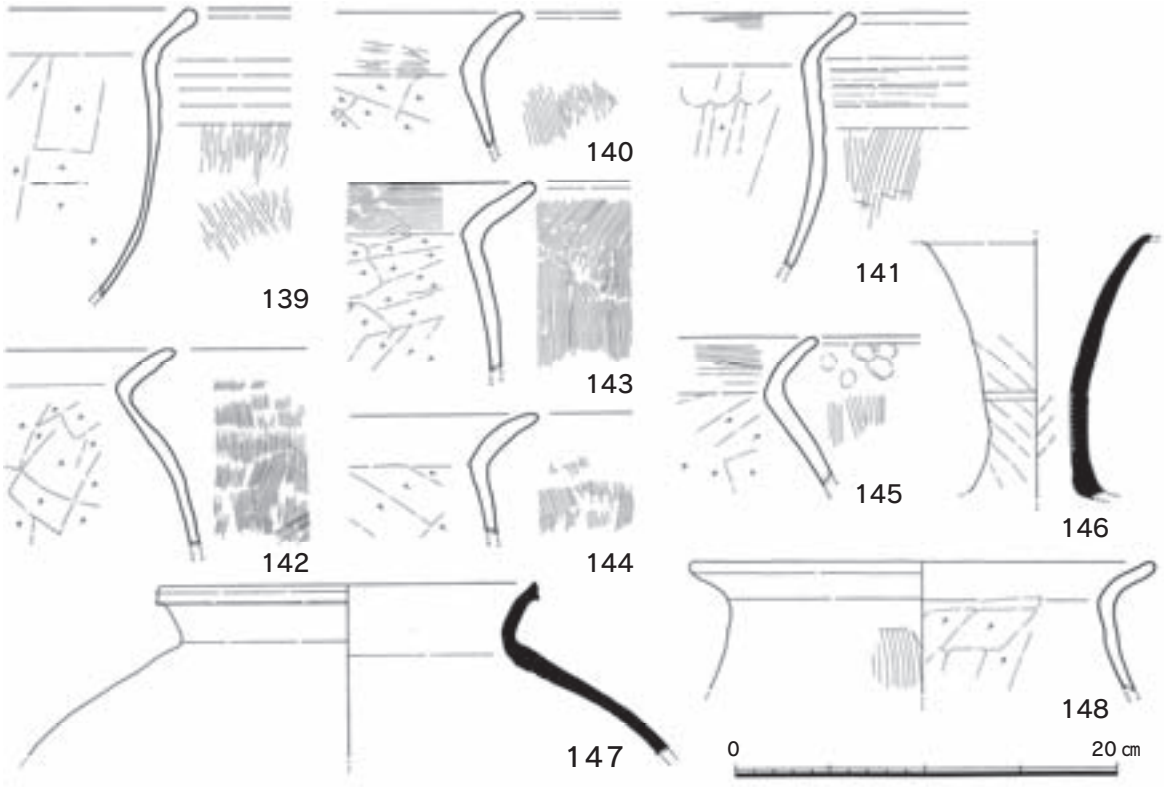
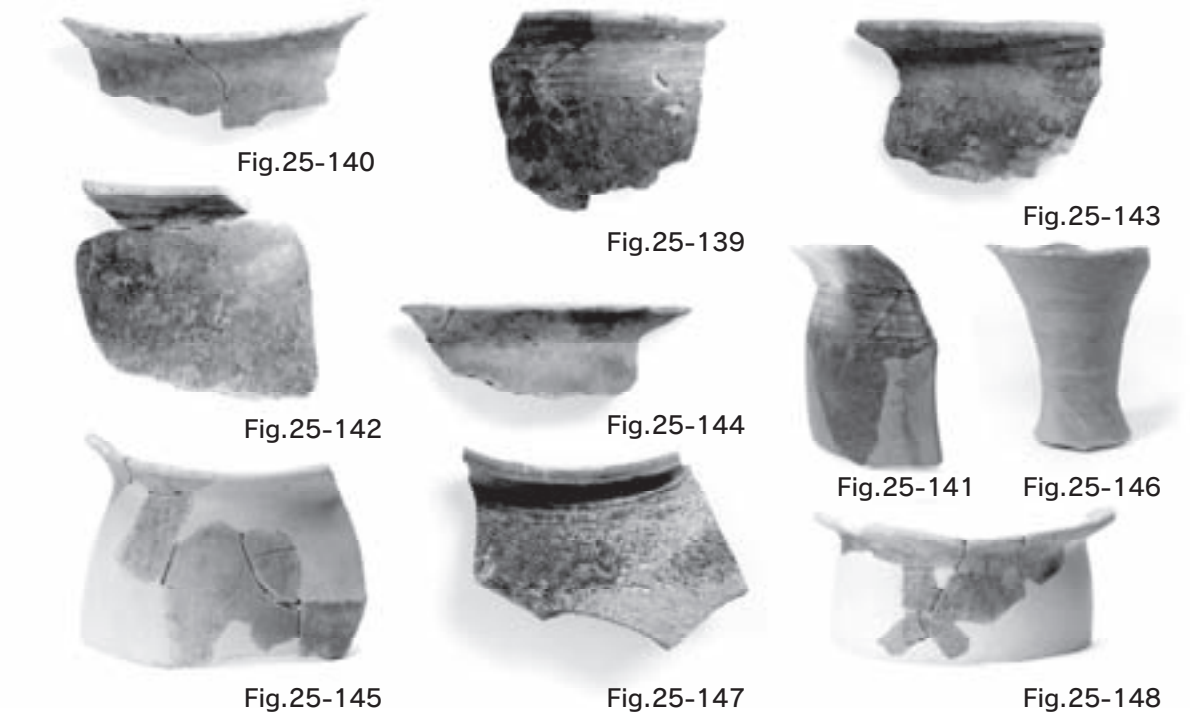


Fig.25　SE出土遺物実測図（S1/4）



PL.17　SE出土遺物

1ｍと浅い。断面形状は、擂鉢のように壁が広がり、他の井戸とは異なる。

出土遺物(Fig.24-134～138、Fig.25-139・141・143、Fig.26-149、PL.16・17)

134の土師器坏aは復元底径7.2㎝、残存高3.9㎝を測る。内外とも摩滅が著しく調整は不明で、底部はヘラおこしとなる。**135**は復元口径11.55㎝、底径7.8㎝、器高3.5㎝の土師器小坏aで、調整は内外ともナデ、底面はヘラ切り後ナデ仕上げとなる。**136**は外面の器表が著しく摩滅する土師器坏aで、底径7.6㎝、器高3.3㎝を測る。**137**の土師器椀ｃは、復元口径13.65㎝、高台径4.8㎝、器高5.1㎝を測り、調整は外底面をヘラ切り後ナデ調整するが板状圧痕がのこる。内外の体部調整はヨコナデを施す。**138**、復元口径16.4㎝、復元高台8.2㎝、器高6㎝を測る黒色土器の九州系Ⅱ類。**139・141・143**は土師器甕片。**139**の残存器高15.2㎝、**141**は13.3㎝、**143**は10㎝を測る。いずれも最大径は口縁部にある。**149**はＬ字状の釘。断面は方形をなす。時期は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期に**143**、Ⅳ・Ⅴ期に**134・135・136**、ⅥA期に**137**、Ⅶ期に**139・141**が該当する。

SE10　SD18の東側に位置し、SK8に切られる。調査区の南側で未調査区へと続いていて、SD16に切られる。掘り方の大きさは径1.7ｍを測り、平面は円形の形状をなす。底面までは深さ1.28ｍを測り、深さ1.2ｍ付近で地山が青灰色粘質土層に変化している。底面は一辺が1.1ｍの隅丸方形をなすと思われる。井戸枠の痕跡は検出できなかった。

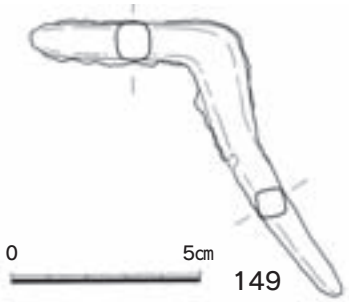


Fig.26 SE9出土遺物実測図 (S1/2)

④ＳＫ（土坑）

土坑は全体で13基検出した。

SK１　SD3とSD8の間に位置し、SK2を切り、Pitに切られる。長軸2.08ｍ、幅65～80㎝、深さ16～20㎝を測る。平面は不整な長方形の形状を呈す。床面は緩やかに弧を描き、中央付近が一番深くなる。壁は緩やかに斜めに立ち上がる。

出土遺物（Fig.28-155･159･160･162･167、Fig.30-186、PL.19）

155は復元口径14.5㎝、底径10.75㎝、器高2.1㎝を測る土師器中皿a、調整は内外ともナデで底面はヘラ切り後ナデで仕上げている。**159**は土師器坏aで、底径7.8㎝、器高3.5㎝を測る。内外面ともに摩滅が著しい。底面はヘラおこしで板状圧痕がのこる。**160**の土師器小坏aは、復元口径13.4㎝、復元底径7.5㎝を測る。調整は内外ともナデ、底面はヘラ切り後ナデによる仕上げとなる。外体部の中位から底面の一部に煤が付着し､また赤彩を施したのか部分的にウッスラとのこる。**162**は復元口径13.6㎝、復元底径8.8㎝、器高3.4㎝の土師器坏aで、調整は内外面体部をナデ仕上げしている。内外の底面は摩滅して調整は不明。**167**は土師器椀。高台径4㎝、器高6.15㎝を測る。器壁は薄く、高台も低い。全体的に摩滅が著しく、調整は不明だが、内面のみ黒色だった可能性もある。**186**は現存復元長18㎝を測る、かり又式の鉄鏃。先端部と基部を部分的に欠損する。基部の断面は長方形、先端部は丸くなる。大宰府編年のⅣ・Ⅴ期に**159・160**が、ⅥA期に**155・162**が該当する。

SK２　SK1とSD4に切られる。幅1.8ｍ前後、深さ12㎝を測る。遺構の両端が重複するため長軸や形状は不明である。出土遺物は砕片が多く、図示できなかった。

SK３　調査区南東側に位置し、SD12を切りSD8・9に切られ未調査区へと続く。深さ18㎝で、検出床面は平坦となる。規模・形状ともに不明。出土遺物は僅かな須恵器･土師器の砕片が出土しただけである。

SK４　調査区北側SD13の西に位置する。検出長1.8ｍ、幅1.4ｍを測るが、未調査区へと続くため形状は不明。深さは10㎝前後とやや浅く、床面は平坦となる。

出土遺物（Fig.28-168･173、PL.19）

168は、復元底径12.4㎝、器高5.9㎝の土師器椀ｃ。内外体部の調整は、回転ナデ外体部下位は回転ヘラケズリを施し、外底面はヘラおこしで調整。外底面に墨書がのこる。**173**、土師器甕口縁部片で残存高7.2㎝を測る。口縁の内外部はナデ調整、内体部はケズリ、外体部はハケで仕上げを施している。**168**は大宰府編年ⅥA期のもの。

SK６　SD4・7の間に位置し、SD5に切られる。一辺1.61ｍで、深さ12㎝の隅丸方形の形状と考えられる。出土遺物には図示できるものはなかった。

SK７　調査区西側に位置し、SE1・2・4・5に切られSK11を切る。長軸2.2ｍ、短軸1.9ｍ、深さ20㎝を測り床面は平坦となる。平面形は楕円形の形状をなす。出土遺物は破片だけで図示できるものはなかった。

SK８　SD10の西側に位置し、SE10を切る。長軸2ｍ、短軸1～1.25ｍ、最大幅1.68ｍ、深さ30㎝を測る。床面は緩やかに弧を描く部分と平坦な部分がある。平面形は、不整な寸づまりの長方形の形状を呈す。

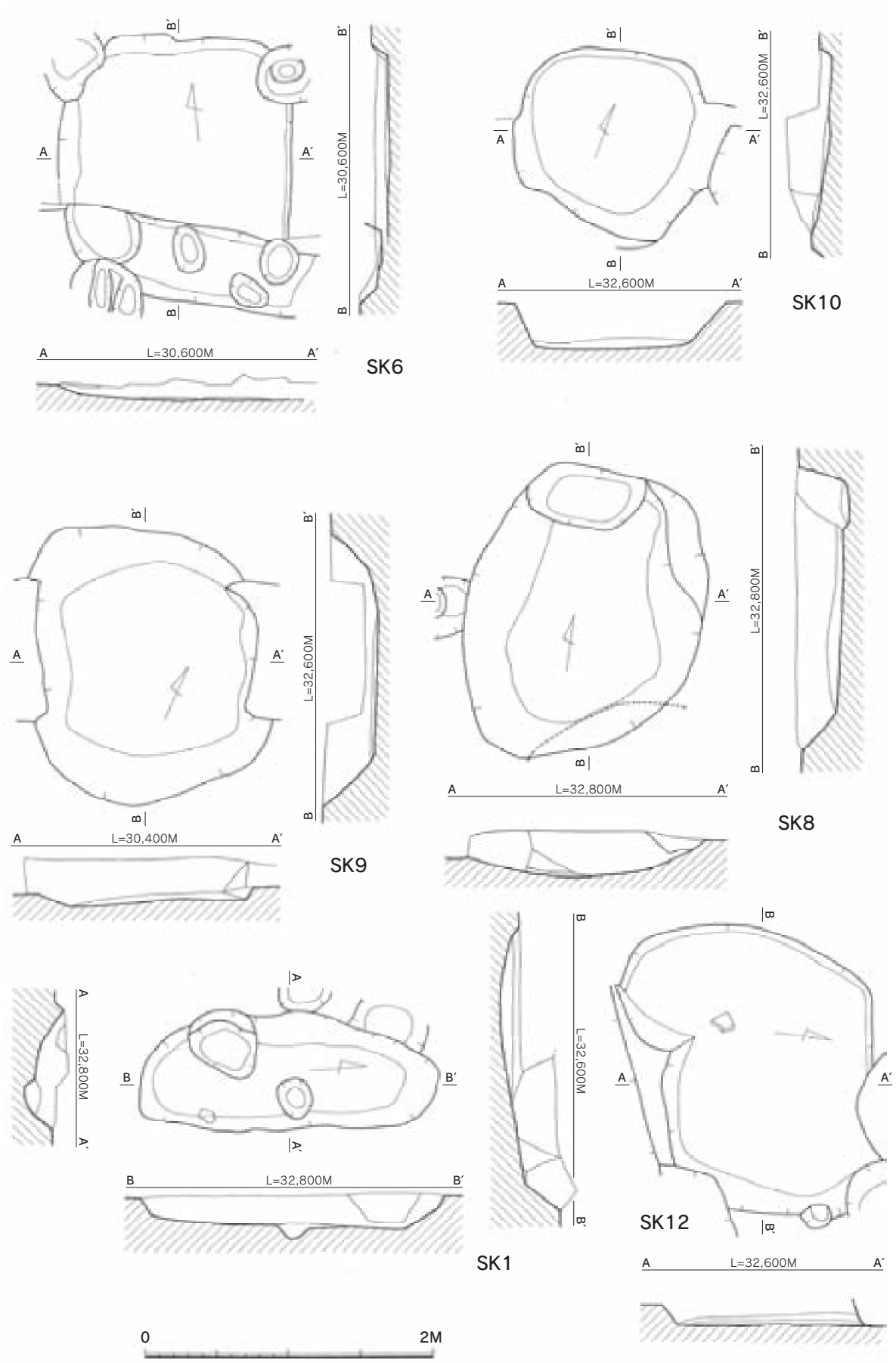
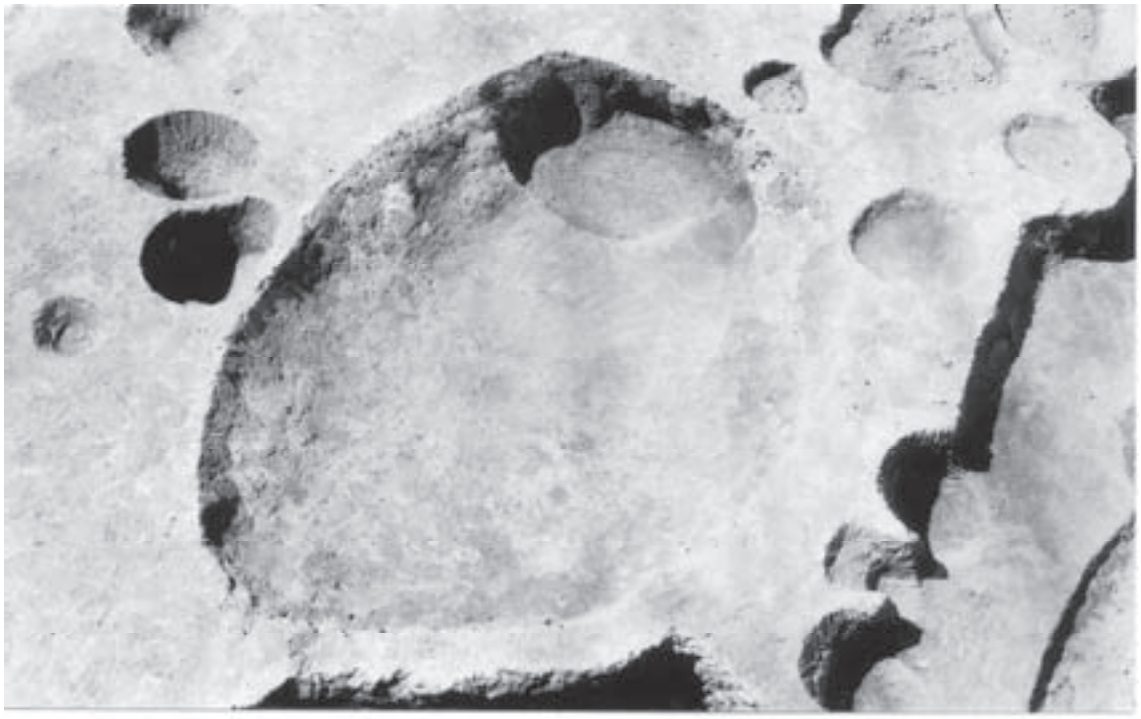


Fig.27　SK実測図（S1/40）



SK8

SK9

PL.18　SK

出土遺物（Fig.28-151・156・158・164・171・172・174・177、PL.19）

151は底径12.6㎝、器高2.3㎝の須恵器中皿aで、内外面体部は回転ナデ調整、内外の底面はナデ調整にて仕上げる。**156**は土師器皿aで、口径17.95㎝、底径13.1㎝、器高2.1㎝を測る。内底面の調整はナデ後回転ヘラミガキ、内体部は横ナデ後回転ヘラミガキを外体部はケズリ後回転ヘラミガキ調整。外底面はヘラケズリ調整を施す。**158**は、復元口径13㎝、底径7.2㎝、器高3.8㎝の土師器小坏a。調整は内面から外体部は摩滅が著しく不明。外底面はヘラおこしとなる。**164**、須恵器坏a片。復元底径8.4㎝、器高3.6㎝を測る。調整は内外ともに摩滅が著しく不明。胎土に2㎜以下の石英・赤褐色粒・雲母を含み、焼成は良くない。**171**は土師器甕の口縁部片で残存高5㎝となる。内体部はケズリ、口縁部は横ナデで調整している。外体部は摩滅して調整は不明。残存高4.95㎝の**172**は、土師器甕口縁片。胎土に砂粒と角閃石を含んで焼成は普通。内体部の調整はナデ、口縁部はヨコナデを施し、外体部はハケによる調整を施している。**174**、残存高4.65㎝の土師器壷の口縁部片。内体部はケズリ後ナデ調整、口縁部はヨコナデ調整を外体部はナデ調整が施されている。胎土に1㎜前後の砂粒や角閃石を含み、焼成は普通となる。**177**は、土師器甕口縁部片。残存器高8.05㎝を測る。内体部の調整はケズリ、口縁部はヨコナデ調整を外体部はハケによる調整を施している。大宰府編年ＩＢ期に**174**が、Ⅱ・Ⅲ期に**171**が、Ⅳ・Ⅴ期には、**151・156・158・164・177**、Ⅶ～Ⅸ期には**172**が該当する。

SK9　SD11・12の西側に位置し、試掘トレンチに切られる。長軸1.93ｍ、短軸1.4ｍ、深さ35㎝を測る。平面形は不整な寸づまりな長方形の形状を呈す。底面は一辺が1～1.1ｍの隅丸方形の形状をなす。壁面の立ち上がりは斜め方向で、床面は緩く弧を描き、断面形は擂鉢状となる。

出土遺物（Fig.28-163、Fig.29-180・184、PL.19・20）

163は復元口径15㎝、復元高台径6.7㎝、器高2.8㎝の緑釉陶器椀。胎土は浅黄橙色10YR8/3の色調をなし、1㎜程度の砂粒を少量含んでいて焼成はあまい。釉調は明緑色を呈し、やや透明で光沢があり細かい貫入がある。釉の剥落は著しいが全面に薄く施釉されていたと思われる。調整は内面ヘラミガキ、外体部は回転ナデ調整。高台部は貼り付けで、高台付近は回転ナデ調整している。外底面は摩滅しているため不明瞭だが、ヘラミガキ調整の可能性がある。**180**は白磁椀口縁部片。残存器高2.8㎝を測る。胎土に砂粒を含まず緻密で灰白色N8/の色調を呈し、焼成は良好である。釉は灰白7.5YR8/1の色調をなし、内外とも均一に施釉される。口縁端部は小さく丸め玉縁風に仕上げた。白磁椀Ｖ類３aに該当する。**184**は、復元高台径7.6㎝、残存器高1.5㎝を測る緑釉陶器の高台片。胎土は、にぶい黄橙色10YR7/3の色調を呈し、1㎜程度の砂粒を少量含んでいて、焼成はやや良い。釉の色調は明緑色をなし、透明で光沢があり、細かい貫入がある。全面に薄く施釉される。内面の調整はヘラミガキ、外面はヘラケズリにて仕上げている。高台部は貼り付けているため、高台付近に回転ナデ調整を施している。**163・184**は近江産の緑釉陶器である。

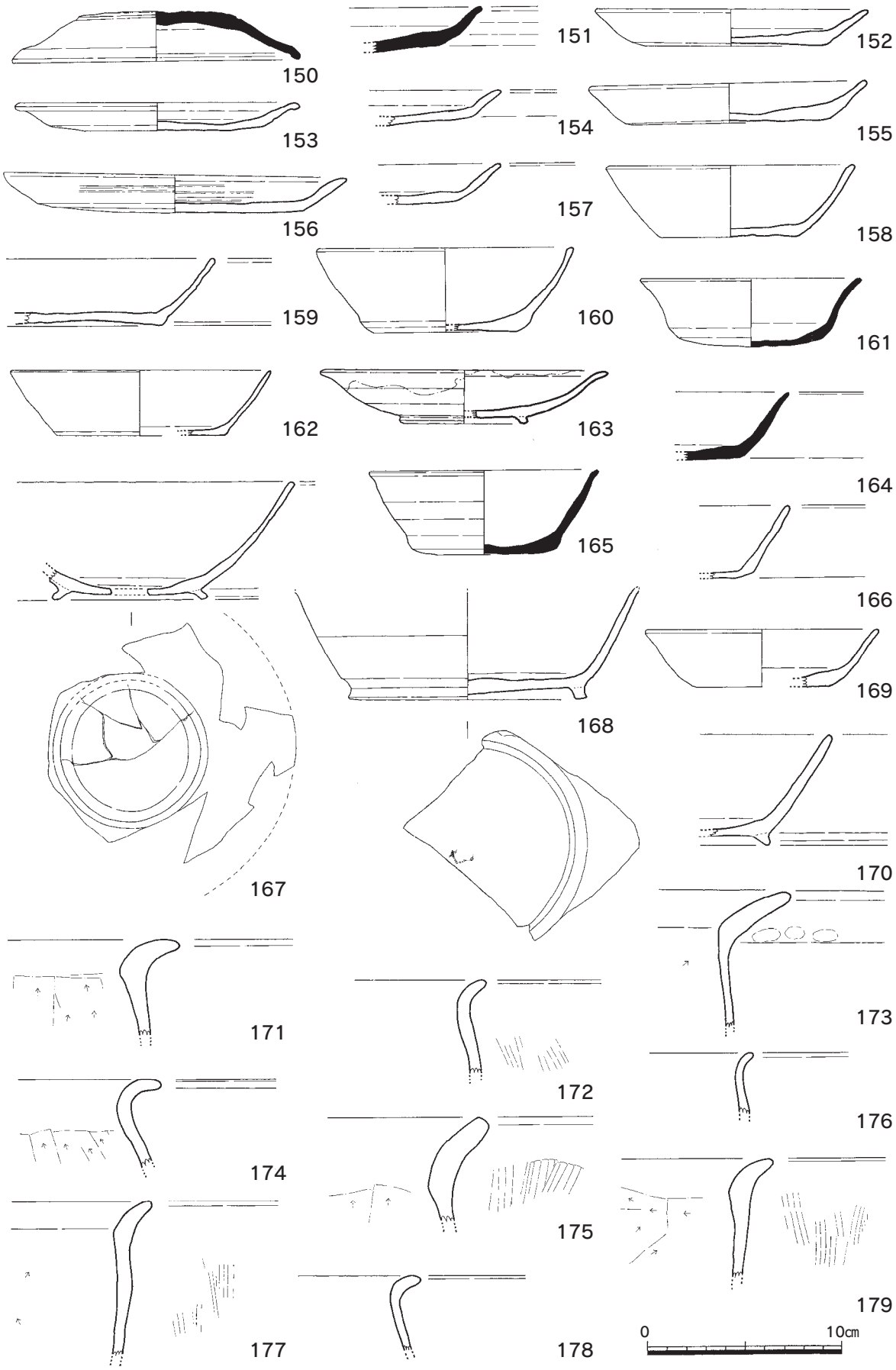
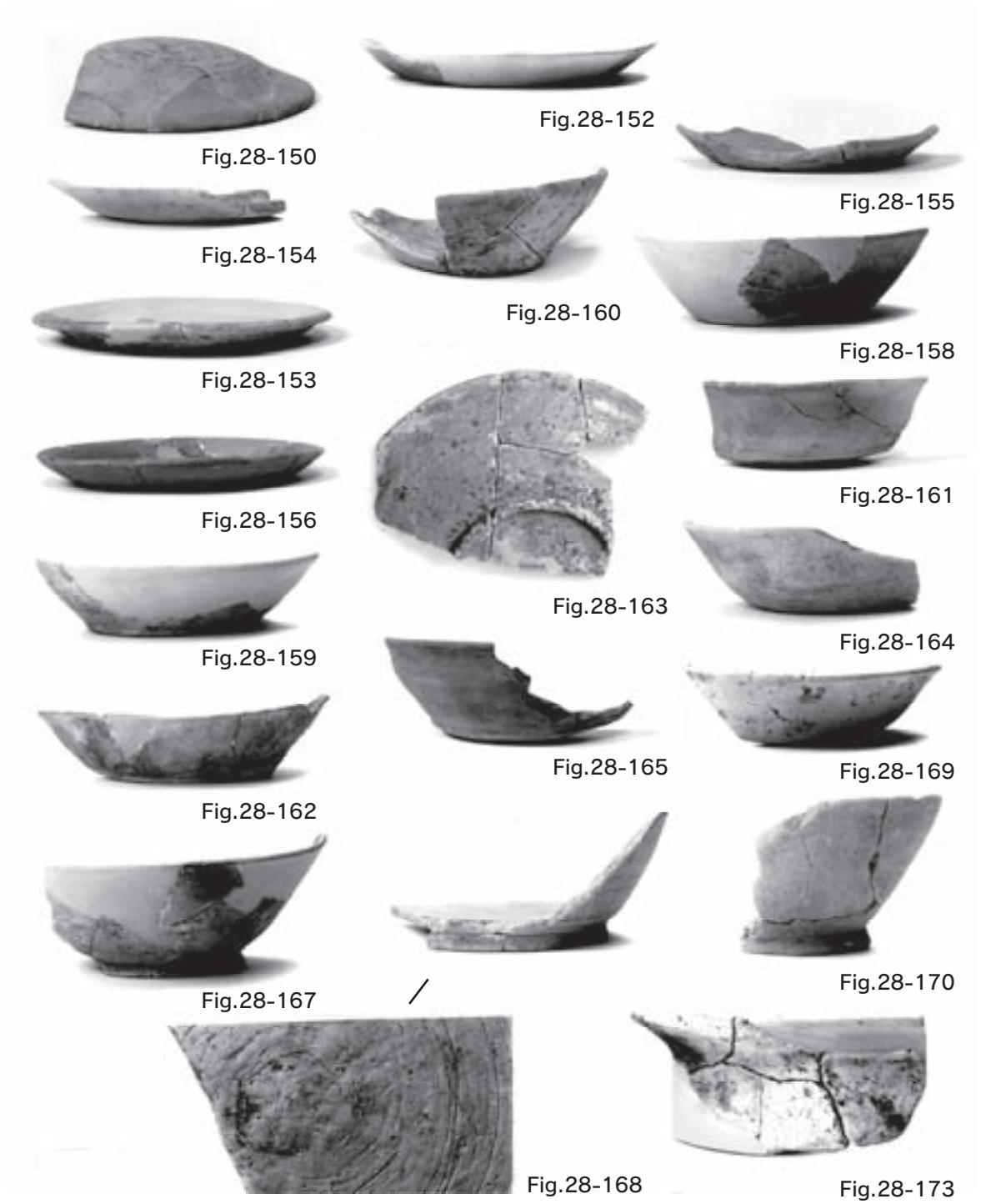


Fig.28　SK出土遺物実測図（S1/3）



PL.19　SK出土遺物

SK10　SK9の南西に位置し、SE9に切られる。長軸1.3m、短軸1m、深さ30㎝を測る。平面形は、不整な隅丸方形の形状をなす。壁面は緩やかな斜めに立ち上がり、床面はほぼ平坦となる。

出土遺物（Fig.28-157・166・176）

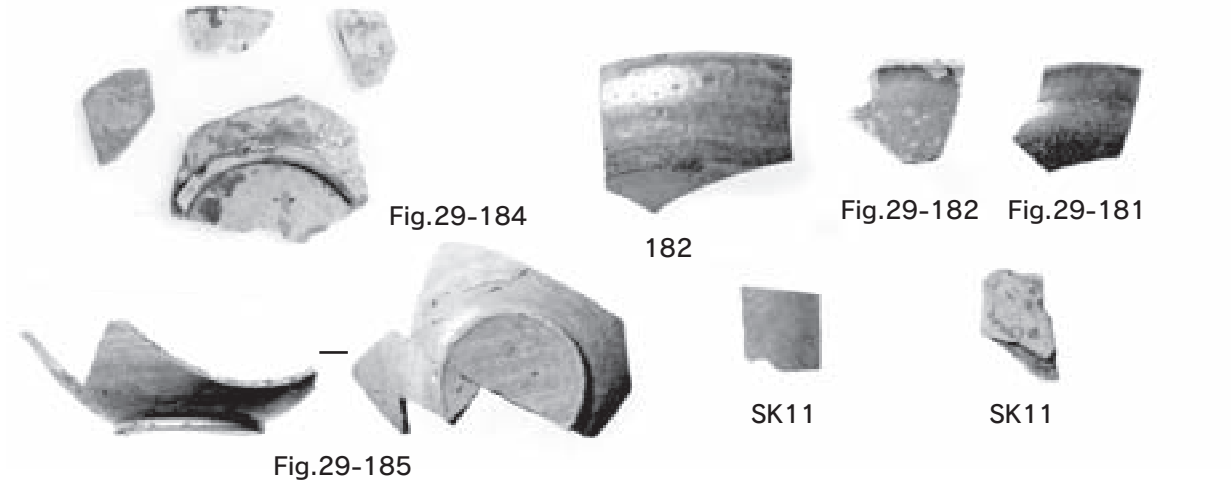
157は、器高2.1㎝の土師器皿aの小片。内外の調整はヨコナデを施し、外底面はヘラ切り後ナデで調整している。内外面ともに橙色5YR6/6の色調を呈す。胎土に1㎜以下の砂粒と赤褐色粒を含み、焼成は良い。**166**の土師器坏aは、器高3.8㎝を測る。内外体部の調整はヨコナデを施す、内外底面は摩耗により調整は不明。**166**は、

器高3.8㎝の土師器坏aで、内面から外体部はヨコナデ調整を施し、外底面は摩耗のため調整は不明。色調は内外面にぶい橙色7.5YR7/4を呈す。**176**、土師器甕の口縁部小片。残存器高3.25㎝を測る。内外とも摩耗が著しく調整は不明。**157**が大宰府編年Ⅳ・Ⅴ期、**166**がⅥA期に**176**はⅥ～Ⅸ期に該当する。

SK11　調査区西端に位置し、SE1・2・5とSK7に切られ、未調査区へ続く。深さ18㎝を測る。遺構の重複のため規模・形状とも不明。

出土遺物(Fig.28-150･152～154･161･165･169･170･175･178､Fig.29･181～183･185･189､PL.19･20)

150は復元口径15.05㎝、器高2.6㎝を測る須恵器の蓋a。外天井部の調整がヘラ切り後ナデ、外体部から内面はヨコナデで調整している。**152**、口径14.3㎝、底径10.3㎝、器高1.9㎝の土師器中皿a。調整は内外ともナデによる仕上げとなる。**153**は復元口径14.9㎝、底径11.3㎝、器高1.5㎝を測る土師器中皿aで、内面から外体部はナデ調整、外底面はヘラ切り後ナデ調整するが、板状圧痕をのこす。**154**の土師器皿aは器高1.9㎝、底径9.8㎝を測る小片。胎土に2㎜以下の石英・赤褐色粒・雲母を含むが、焼成は良い。**161**は、復元口径11.6㎝、復元底径7.6㎝、器高3.6㎝を測る須恵器坏aで、内面から外体部はナデにより調整、外底面はヘラ切り後ナデにより調整するが、板状圧痕をのこす。**165**、復元口径12㎝、復元底径7.5㎝、器高4.45㎝の須恵器坏a。胎土に1㎜以下の砂粒を含むが焼成は良い。調整は内外体部をヨコナデ、内底面はヨコナデ後一定方向のナデで、外底面はヘラ切り後ナデで仕上げ。**169**の土



PL.20　出土遺物

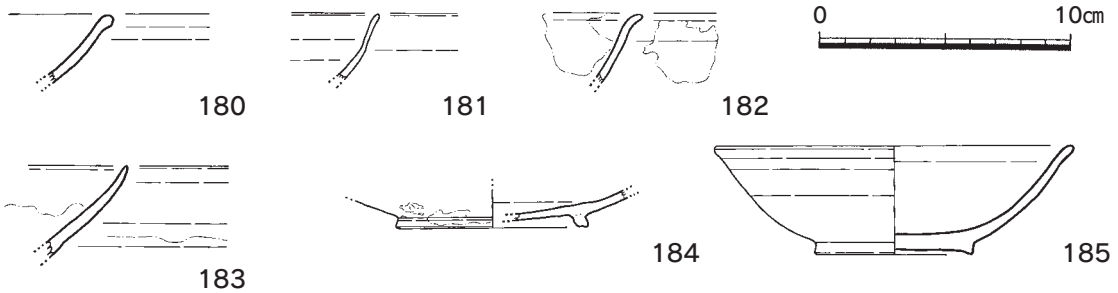


Fig.29　SK出土緑釉陶器実測図（S1/3）

師器坏aは復元口径12.2㎝、復元底径7.2㎝、器高3㎝を測る。**170**の土師器坏cは、小片で底径8㎝、器高5.8㎝を測る。**175**は残存高5.5㎝の土師器甕口縁部片。内体部はケズリを、口縁部はヨコナデで外体部はハケによる調整が施される。**178**は土師器甕口縁部片で、残存器高3.95㎝を測る。**181**は残存器高2.7㎝の緑釉陶器の口縁部片。胎土は灰色7.5Y6/1の色調で、微細粒の砂粒を少量含み緻密。焼成は良い。調整は回転ナデにより仕上げ。釉はオリーブ灰10Y4/2の色調をなし、透明で光沢があり、細かい貫入がはいる。内外ともに施釉される。**182**も緑釉陶器の椀の口縁部片。残存器高2.8㎝を測る。胎土は灰白色2.5Y8/2の色調で、微砂粒が少量含まれ、焼成はややあまい。釉は明淡緑色の色調をなし、透明で光沢がある釉で細かい貫入がはいり、小さな気泡が少しある。釉は全面に施釉される。**183**は越州窯系青磁椀Ⅱ類2dの口縁部片。残存高3.7㎝を測る。素地は灰5Y6/1の色調を呈し、微砂粒を僅かに含むが緻密で、焼成も良い。釉は灰オリーブ5Y5/2の色調で、やや透明で光沢がある。細かい貫入があり釉の表面に鉄分が浮き出ている。釉は内外に施釉され、内外に釉だれが見られる。**185**は復元口径14.2㎝、高台径6.3㎝、器高4.3㎝の防長産の緑釉陶器椀。胎土は灰白色2.5Y8/2の色調で、微砂粒を少量含むが緻密で、焼成も良い。釉は灰白色10Y7/2の色調をなし、透明で光沢がある。釉は全面にハケで施釉されるが、高台付近と口縁部付近がやや厚い。高台は削りだして作り、畳付の釉は掻きとる。内体部はヘラミガキ調整、外体部と外底面は回転ヘラケズリによる調整。**181・183**は近江産のもの。大宰府編年のⅡ・Ⅲ期には**175・178**が、Ⅳ・Ⅴ期に**150・153・170**が、ⅥA期に**152**、ⅥB期に**165**、Ⅶ期に**154・161・169**が該当。

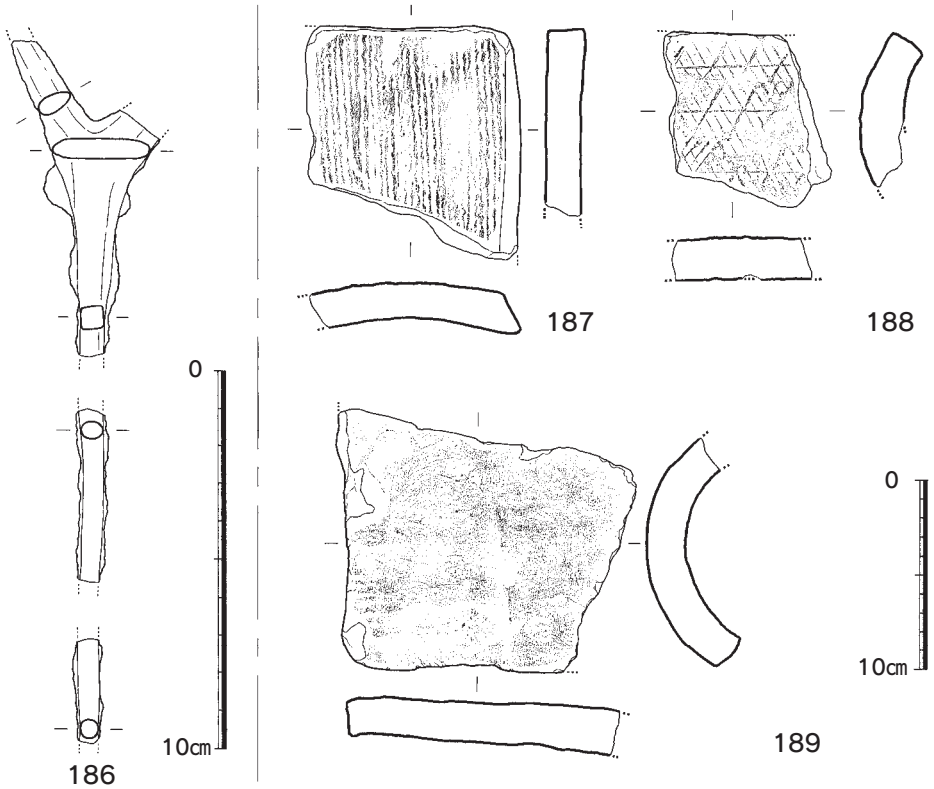


Fig.30　SK出土遺物実測図（S1/2・S1/4）

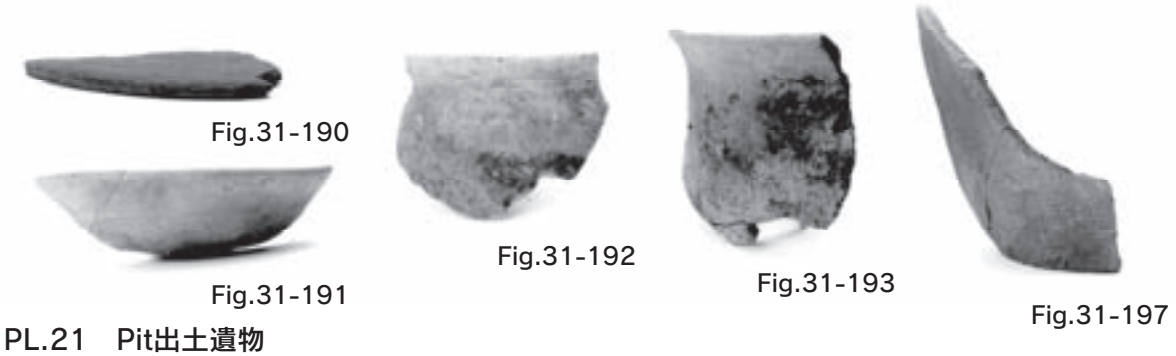
SK12・13　SD18の東に位置し、SK9に切られる。長軸1.98m、短軸1.78m、深さ17～20㎝を測る。北壁は直線で西・東壁は僅かに弧を描く。南壁は東南部から80㎝直線で延び、そこから屈曲し、さらに西南コーナーへと弧を描いて延びる。平面形は方形と隅丸長方形が連結した形状を示す。検出時に新旧関係は捉えられなかった。方形状のものをSK12、隅丸長方形状をSK13として遺物を取り上げた。床面は緩やかな曲線を描き中心付近が深くなる。SK12で図示できるものは**179**だけである。**179**は、残存高6.25㎝の土師器甕の口縁部片。内体部はケズリ調整、内外の口縁部はヨコナデ調整を施し、外体部はハケによる仕上げとなる。SK13出土として**Fig.30-187・188**を図示した。**187**は現存長12.4㎝、現存幅11.4㎝、厚み1.95㎝を測る平瓦片。表裏面とも浅黄橙色10YR8/2と一部にぶい黄橙色10YR7/3、淡橙色5YR8/4の色調をなす。胎土に赤褐色粒と石英を多く含むが、焼成は良い。**188**は平瓦片で、現存長9.3㎝、現存幅8.8㎝、厚み2.35㎝を測る。色調は褐灰色10YR6/1を呈し、焼成は良い。

⑤Pit

Pitは全体で168個を検出したが、建物跡や柵状遺構として纏まるものはない。

出土遺物（Fig.31-190～197、Fig.32-198～202、PL.21）

190は、復元口径17㎝、残存器高1㎝の須恵器蓋。外体部はナデ調整、口縁部から内体部を回転ナデ調整、内天井部はナデ調整を施し、焼成は良い。Pit96からの出土。**191**、復元口径12.4㎝、残存高3.4㎝を測る土師器の坏a。内底面はナデで、内体部から外体部を回転ナデで調整、外底面はヘラおこし後ナデにより調整を施す。胎土に



PL.21　Pit出土遺物

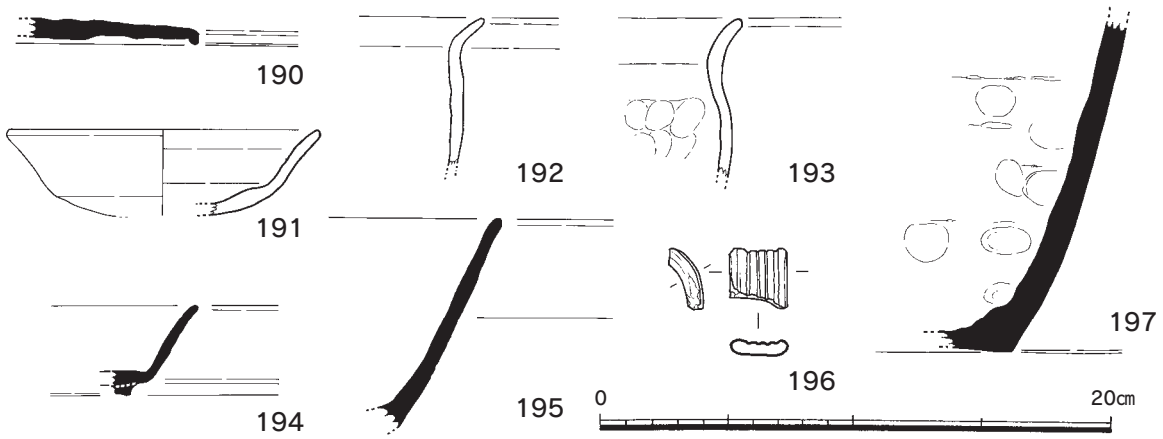


Fig.31　Pit出土遺物実測図（S1/3）

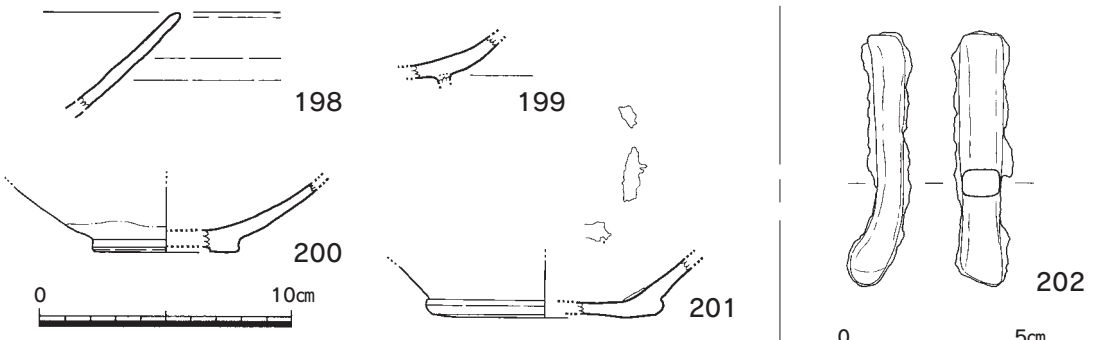


Fig.32　Pit出土遺物実測図（S1/3・S1/2）

2㎜以下の石英・雲母を含むが焼成は良い。Pit132から出土した**192**は、土師器壷の口縁部片で、残存高5.8㎝を測る。内体部から外口縁部は著しく磨耗し、調整は不明。外体部はヨコナデで調整され、胎土に5㎜以下の石英・雲母・赤褐色粒を多く含むが、焼成は良い。**193**はPit42出土の土師器壷口縁部片。残存高6.4㎝を測る。内体部はナデ調整、外体部は摩滅し調整は不明である。内外の口縁部に煤が付着する。Pit117から出土した**194**は須恵器坏ｃ。復元高台径8.6㎝、器高3.5㎝を測り、胎土に1.5㎜以下の石英を含むが焼成は良い。内面から高台部までは回転ナデにより調整を施す。**195**は須恵器大椀aの体部片。残存高8.3㎝で、胎土に2㎜以下の石英・雲母を含むが焼成は良い。ロクロ回転は左方向となり、内面から外体部の中位までは回転ナデで下位は回転ヘラケズリ調整を施す。**191・195**はPit101から出土した。水注取手片の**196**は、現存高2.4㎝。素地は黄灰色2.5Y5/1で、釉はにぶい黄色2.5Y6/3の色調をなす。釉はガラス質で透明で光沢があり、全面に施釉される。Pit25から出土した。Pit20から出土した**197**は、須恵器壷の底部片。残存高13.2㎝、復元底径13.8㎝を測り、内体部はナデ調整で指頭痕と素地の粘土紐痕が部分的に見られる。外体部に格子のタタキ痕を体部下位は回転ナデで、外底面はナデ調整される。内面にアンモニア痕がのこり、便器として使用していた可能性がある。**198**は越州窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部片で残存器高3.9㎝を測る。素地は灰白色2.5Y7/1、釉はオリーブ黄5Y6/3の色調を呈す。素地には微細な黒色粒を少量含むが、焼成は良い。釉は内外に均一に薄く施釉される。近江産の緑釉陶器の皿片の**199**は、残存器高2㎝で、素地は浅黄橙色10YR8/3を釉は灰白色10Y7/2の色調をなす。釉薬は透明で光沢があり、全面に施釉される。**198・199**はPit100から出土。**200**は白磁椀Ⅳ類の底部片。復元高台径5.8㎝、器高2.8㎝で、素地は灰白色N8/、釉は灰白7.5Y8/1の色調を呈し、素地に微細な黒色粒を含む。高台はケズリだし後回転ヘラケズリにて調整。内外に施釉される。Pit122から出土した。**201**は、越州窯系青磁Ⅰ類２イの椀片で復元高台径9.4㎝、残存器高2.4㎝を測り、高台は僅かに、あげ底で内面に目あとがのこる。素地は灰白2.5Y7/1の色調で微細な黒色粒を含み、釉はオリーブ黄7.5Y6/3の色調をなす。内側全面は施釉、外面は露胎するが僅かに釉が飛び散っている。Pit５から出土した。Pit44から出土の**202**は、現存長6.6㎝、厚み0.7㎝の釘。先端・基部ともに潰れて、断面は長方形の形状をなす。**197**は大宰府編年のⅧ期に該当する。

４．まとめ

今回の調査区は260㎡と狭く調査の情報は限られたものになるが、多くの溝(SD)が交差・重複している。ここでは、それらの遺構についての成果と現段階での一定の整理をしておきたい。

まず大まかにSD10から東側にある溝についての時期をまとめると条107・200次調査では、西側溝が調査区の東端に近く、西側溝より東側の溝は検出されていない。条150次調査ではSD7・4・5・6・9・3・1と7条の溝が検出されたが、明確に時期の設定できる溝はSD7とSD1だけで、SD1は10世紀以降の埋没となり、中央大路が縮小していく過程での側溝と捉えたい。

Fig.4に示す様にSD10は中央大路西側溝で条107SD001・条200SD001に繋がり、埋没も出土遺物から８世紀後半から９世紀初頭の時期で、条107・200次の埋没時期とほぼ一致している。

SD10の東側にあるSD７は、遺物から８世紀後半の埋没となるが、この溝から延びる溝は、条107・200次には検出されず、この条150次区内だけにあり、埋没時期がSD10と同一時期となる。現段階では西側溝や東側溝といわれる溝には、ほぼ同一時期の副溝を検出した事例はなく、この調査区内だけにSD7のような副溝がある。この溝をどう捉えるかの結論は、同様な事例が検出された時点までの課題としたい。

次にSD10より西にあるSD8・11・18について、SD8はN-32°-W、SD11はN-41°-WSD18はN-33°-Wを測り、Fig.9に示される様にSD8だけが条107SD31に続く溝と考えられるが、いわゆる条坊跡の東西南北に設定されていない。これらの溝の所在について議論する必要があろう。しかし溝の振れについては、狭い調査区内の可能性の一部に過ぎず、結論づけや性格づけに関しても、これらに続く溝などデータが蓄積した段階での結論で将来に委ねたい。ただし、これらの溝については時期の決定できる遺物はないが、土層の切り合いからSD10以前のものであるのは確実である。

またSD12については、条107SD30に条200SD002に続く溝として捉えられるが、条150次内で東に屈曲して、まだ続いていく事を示している。この溝に関しても多くのデータが集まった時点での結論となり、これも将来に委ねたい。

調査区内の宅地利用については、SD10以前の遺構は皆無の状況にある。SD10の埋没する時期とほぼ同じ時期か、極めて近い時期まで使用されていた遺構は、SE3・4・5・7・8・9、SK1・4・11などがあげられ、今回検出できた遺構のほとんどがSD10の埋没とともに埋没し、このSD10周辺が宅地としては、使用されなくなった時期とも言える。

出土遺物については、井戸や土坑から越州窯系青磁片や緑釉陶器など搬入品が多く出土している。現段階での調査事例でも搬入品の多くは、中央大路東・西側溝周辺部や役所的建物の所在する付近にしか出土していない。この調査区内でも、この結果を示したものといえよう。

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと
書名	大宰府条坊跡
副書名	第１５０次調査
巻次	
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第９５集
編集者名	渡邊和子
編集機関	筑紫野市教育委員会（教育部・文化振興課　文化財担当）
所在地	〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1-1-1　TEL.092-923-1111㈹
発行年月日	西暦２００９年　３月　２７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡	ちくしのし 筑紫野市 ふつかいちゅうおう 二日市中央	176	210044	33° 00′ 01″	129° 30′ 01″	1994.4.14 ～ 1994.5.2	260㎡	共同住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府条坊跡	都城跡	奈良時代 平安時代	溝 土坑 井戸	須恵器 土師器 緑釉陶器	

大宰府条坊跡第150次調査

筑紫野市文化財調査報告書

第　95　集

平成21年３月27日

発　行　　筑紫野市教育委員会
〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
TEL 092－923－1111㈹
FAX 092－923－9644

印　刷　　信光社印刷㈲
福岡県朝倉市一木32-1